16.5.17

OYASHIKI SITE

御屋敷遺跡

— ホテル八幡増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査出土資料整理報告書 —

2002. 3

上山田町教育委員会

御屋敷遺跡

— ホテル八幡増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査出土資料整理報告書 —

2002. 3

上山田町教育委員会

御屋敷遺跡全景

Ｙ４号住居「御屋敷の５点セット」

序

上山田町は長野盆地南部に位置し、その面積は15.62㎢を測る長野県内一小さな町です。

明治36年千曲川沿いに温泉が掘削され、その後上山田温泉として数多くの旅館が建ち並び、県内外から多くの宿泊客で賑わう風光明媚な温泉場として、また善光寺参りの精進落しの湯として発展してまいりました。

町の東側には千曲川が雄大に流れ、西側は、冠着山、八頭山、大林山など1,000ｍ超級の山々が連なり、その麓には傾斜地を開拓して築かれた『棚田』も随所に残り、りんごやぶどうなどの果樹栽培も盛んに行われております。

また、町の南一帯は広大な水田地帯となり、一部にはトルコギキョウを中心とする花き栽培を行うビニールハウスも多く建ち並んでいます。

御屋敷遺跡は町のほぼ中央。千曲川へ注ぎ込む寺沢川と日影沢川とに挟まれた、扇状地形をなす断崖上に展開する縄文時代から中世に至る複合遺跡で、古くから土器や石器など多くの遺物が表面採集される場所として周知されておりました。

昭和45年に着工されたホテル八幡建設工事の際、遺跡の多くは保護措置がされず破壊されてしまいましたが、翌年計画された増築工事ではホテル側の理解と協力が得られ、当時千曲川水系古代文化研究所主幹の森嶋稔先生を団長に共同の発掘調査が行われました。

調査は限られた範囲ではありましたが、弥生時代から古墳時代を中心とした集落跡が検出され、多くの遺物が出土しました。特にＹ４号住居跡から出土した土器は、当時不鮮明であった弥生時代後期の箱清水文化解体期の良好な資料となり、Ｙ１号住居跡出土資料とともに「御屋敷式土器」という新たな形式名が設定された重要な遺跡となりました。

これまで御屋敷遺跡は正式報告がされておらず、町としても懸念していたところではありましたが、今回、国の補助事業であります『緊急地域雇用特別事業』により報告書作成を目的とした再整理作業「御屋敷遺跡出土資料整理事業」を平成11年度から平成12年度にかけて実施いたし、ここに発掘調査から30余年の年月を経て報告書として刊行することができました。地域史解明の一助としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に携わった関係者のみならず、報告書刊行に至るまで貴重なご助言やご協力、資料の提供をしてくださった諸氏に厚く御礼申し上げますとともに、炎天下、時には強い風雨の中、整理作業に携わっていただきました皆様に心より感謝申し上げます。

平成14年３月

上山田町教育委員会
教育長　山　崎　寛　茂

例　　言

1．本書は、昭和46年、ホテル八幡（現在　ジャンボクラブ信州）増設工事に伴い、同ホテルの委託を受け千曲川水系古代文化研究所（主幹　森嶋　稔）が同ホテルと共同で実施した発掘調査により出土した資料を、国の補助事業『緊急地域雇用特別事業』による「御屋敷遺跡出土資料整理事業」として、平成11年度及び平成12年度に行った御屋敷遺跡再整理報告書である。

2．再整理作業は、社団法人更埴地域シルバー人材センターへ事業委託した。

3．本書で扱う遺構名については、当時付された遺構名が既に定着し様々な文献等で引用されていることから、混乱を避けるため従来使用されている遺構名を用いた。

4．本書は、発掘調査から31年という長い年月を経ての報告であり、発掘調査当時の記録やこれに伴う資料について多くの不鮮明な部分が存在する。また、本報告は「御屋敷遺跡出土資料整理事業」において行った作業で得られたものの報告である。よって、出土土器の掲載に主眼を置いているため、再整理を実施していない遺構に関しては文章の中で概略を述べるにとどまり、遺構図の掲載は行っていない。

5．本書には、発掘調査で得られた資料のほか、過去に表面採集され上山田小学校で保管されている当該遺跡出土土器も一括掲載している。

6．これまで、御屋敷遺跡の出土土器については、更級埴科地方誌及び長野県史など様々な文献にとりあげられ、遺物図も多く掲載されている。
今回の整理作業においてこれらの所在を突き止め、再実測し提示しようと試みたが、既に散逸してしまい行方が解らなくなってしまった遺物も少なくない。よって、従来資料提示してあった遺物等が本報告に掲載されていないものも存在する。

7．本書の執筆・編集は寺島が行った。また本書作成における作業について下記の方々の協力を得た。

長野市埋蔵文化財センター	主　査	千野　浩	遺物写真撮影
長野市埋蔵文化財センター	主　事	風間栄一	古式須恵器実測及び浄書
長野市埋蔵文化財センター	調査員	青木善子	遺物実測図浄書

8．本書作成において下記の諸氏及び機関よりご指導・ご助言を頂戴した。記して感謝申し上げる。
青木一男・飯島哲也・大竹俊正・倉沢正幸・笹澤　浩・佐藤信之・中村五郎・翠川泰弘・森嶋和子・
矢口忠良・矢島宏雄・山口　明（敬称略）
上田市立信濃国分寺資料館・千曲川水系古代文化研究所・戸倉町教育委員会
長野市埋蔵文化財センター・長野市立博物館

9．本書に掲載している資料は、上山田町教育委員会で保管している。

目　　次

序
例　　言

第Ⅰ章　調 査 経 過……1
　第1節　発掘調査に至る経過……1
　第2節　御屋敷遺跡の概要……2
　第3節　出土資料の再整理……4
　　1　緊急地域雇用特別事業……4
　　2　整理調査体制……4
　　3　整理の方法……5

第Ⅱ章　上山田町の遺跡と分布……7
　　1　縄文時代以前……7
　　2　弥生時代……7
　　3　古墳時代……7
　　4　奈良時代以降……8

第Ⅲ章　調 査 成 果……13

報告書抄録・奥付

挿図目次

第１図　上山田町の遺跡分布図……11
第２図　Ｙ１号住居復元図……13
第３図　Ｙ１号住居出土土器……14
第４図　Ｙ２号住居出土土器……16
第５図　Ｙ４号住居出土土器……17
第６図　Ｙ６号住居出土土器……18
第７図　Ｈ１号住居出土土器……19
第８図　Ｈ３号住居出土土器……19
第９図　Ｈ４号住居出土土器……20
第10図　Ｈ６号住居出土土器……20
第11図　Ｈ７号住居出土土器……20
第12図　Ｈ12号住居出土土器……21
第13図　Ｈ15号住居出土土器……22
第14図　Ｈ16号住居出土土器……23
第15図　Ｈ18号住居出土土器……24
第16図　Ｈ19号住居出土土器……25
第17図　遺構外出土土器……26
第18図　上山田小学校所蔵資料……27

挿表目次

第１表　上山田町内遺跡一覧表①……9
第２表　上山田町内遺跡一覧表②……10
第３表　出土土器観察表①……28
第４表　出土土器観察表②……29
第５表　出土土器観察表③……30
第６表　出土土器観察表④……31
第７表　出土土器観察表⑤……32
第８表　出土土器観察表⑥……33
第９表　出土土器観察表⑦……34

第Ⅰ章　調査経過

第１節　発掘調査に至る経過

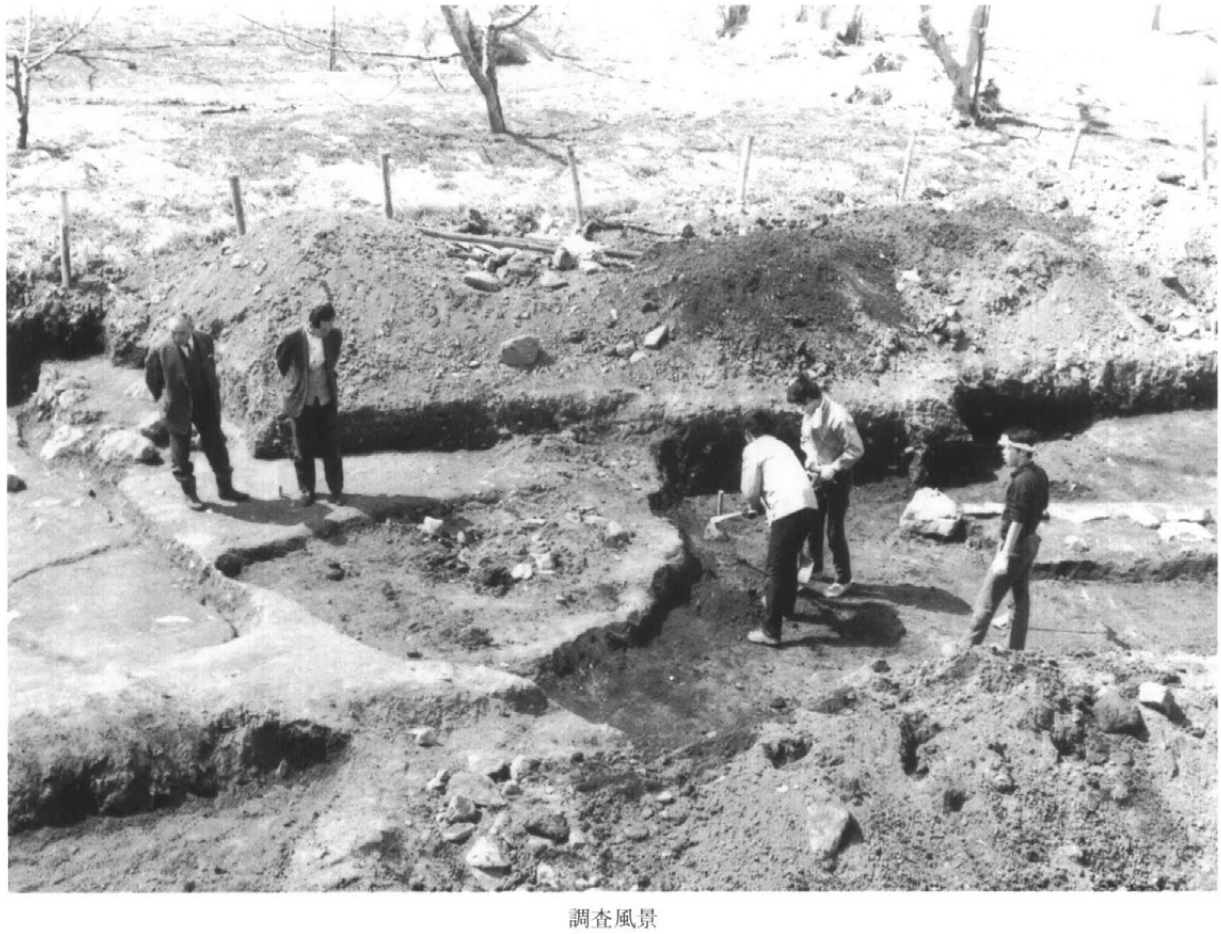
更級郡上山田町大字上山田字御屋敷地籍は、古くから弥生時代から古墳時代の遺物が表面採集されることが周知されており、採集された遺物の一部は上山田小学校に寄贈され現在も保管されているが、そのほとんどは既に散逸してしまい行方不明となってしまっている。

昭和45年10月に御屋敷遺跡範囲最東部にホテル八幡（現在のジャンボクラブ信州）の建設工事が着工された。今となっては当時の状況を知る術はないが、御屋敷遺跡内における初の開発行為は不幸にも発掘調査による記録保存という保護措置が講じられないまま破壊されてしまった。

しかしながら、翌、昭和46年にはホテル八幡本館の北西側に新たに増築が計画され、これに伴いホテル八幡代表北川原幸四郎と当時小諸市坂ノ上小学校教諭であった森嶋稔による埋蔵文化財の保護協議がなされ、この増築部分においての記録保存を目的とした発掘調査を、森嶋稔を調査担当者にホテル側と共同で実施することとなった。調査は昭和46年３月18日に着手され、４月10日まで実施された。

調査範囲内に４ｍ四方のグリッドを設定し手作業による掘削を行なった。当該地全体は果樹園となっており、地表から40cm程度で遺構検出面へと達する。

なお、当該地は昭和30年以降、段階的に造成が行なわれていたようで、平成７年度に実施した民間アパート建設に伴う発掘調査の際にもこの造成時に盛られたと見られる土が確認されている。この状況は遺跡の東側にくるほど顕著に見られるようで、西方の山側から土砂を押し出し平坦にしようとしたものと思われる。



調査風景

第２節　御屋敷遺跡の概要

御屋敷遺跡周辺は、千曲川へと注ぐ女沢川、寺沢川、日影沢川の３河川により形成された扇状地形をなし、この扇状地上には多くの遺跡が存在する埋蔵文化財包蔵地として周知されており、御屋敷遺跡は寺沢川と日影沢川とに挟まれた扇状地の扇端部に位置する遺跡であるが、遺跡の東方は断崖状の落ち込みを見せている。

当該地には小字名で羽場という地籍がある。この「ハバ」とは『断崖』を意味するもので、御屋敷遺跡や隣接する羽場遺跡の立地する場所より東側には急激な落差があり断崖状の地形となる。

千曲川はこれまでに幾たびも流路を変えているが、仁和４年（888）の大洪水は千曲川流域の多く集落や生産域をのみこむ大規模災害であり、長野盆地南部のいたるところでその痕跡が認められている。当町においても例外ではなく、力石条里遺跡群の発掘調査においてもこの洪水によると見られる砂層の堆積が確認されており、現在の力石地区及び三本木地区に広がる水田地帯周辺が河床あるいは河川敷であったことが看取され、これら地形が千曲川の大規模な氾濫によって土砂が侵食されてできた地形であることはおよそ想像がつく。なお、当町北部にあたる城腰地区の城山の麓に祀られる波閇科（はべしな）神社の「ハベ」についても同様に『断崖』の意味を持ち、同じような断崖地形となっているため、この御屋敷遺跡周辺から波閇科神社にいたる一帯は河岸段丘のような地形を呈し、三本木地区には高河原や馬場河原、温泉地区には下河原など河川に関連する地名が多い。

御屋敷遺跡は古くから遺物が出土する遺跡として注目されていた。これは、第１節で述べたように昭和30年ごろから開始された造成工事により地表面に現れた土器を採集したものと考えられ、その採集された土器の量を見ると比較的大規模な造成工事であったように思われる。採集された土器は上山田小学校に保管されたほか、当時教員で在地の郷土史研究家中島惣左衛門をはじめとする周辺住民の個人所有となっているものが多く、弥生式土器集成に上山田小学校に保管されていた採集資料が藤森栄一により掲載され、また同じころ刊行された上山田町史にも中島惣左衛門所有の遺物が僅かながら紹介されている。

本書においても現在上山田小学校に保管されている資料を一括掲載したが、その多くは後世に採集されたものであり、当時掲載されていた土器のほとんどは散逸してしまって所在は明らかでない。

昭和45年10月に着手されたホテル八幡の建設工事現場を、当時、千曲川水系古代文化研究所主幹であり、小諸市坂ノ上小学校教諭であった森嶋稔が見たときには既に基礎工事が完了しており、無残にも破壊されてしまった御屋敷遺跡を「目を覆うものがあった」と後に更級埴科地方誌原始古代中世編に記しているとおり、その遺跡破壊は悲惨な状態であったことであろう。折しも、このころは中央自動車道の建設工事が長野県内においても着手され始めた時期で、これら工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査も各地で実施され始め、埋蔵文化財保護への関心や気運が高まりつつあった時期だっただけに残念でならない。結果的に翌年３月に増築部分の発掘調査をホテル側の理解と協力により実施することができたが、本館部分と比較すればその調査範囲は大変狭いものであった。

なお、平成７年度には民間アパート建設工事に伴う発掘調査が行われている。この調査も狭い範囲ではあったが弥生時代後期住居跡２軒と木棺墓１基、平安時代住居跡２軒が検出されている。

引用・参考文献

上山田町　　1963　『上山田町史』
千曲川水系古代文化研究所　1971　『御屋敷遺跡概報』
森嶋　稔ほか　1983　『更級埴科地方誌　第二巻　原始古代中世編』　更級埴科地方誌刊行会
藤森栄一ほか　1989　『弥生式土器集成　本編』　東京堂出版
森嶋　稔・翠川泰弘　1996　『御屋敷遺跡Ⅱ』　上山田町教育委員会

第３節　出土資料の再整理

１　緊急地域雇用特別事業

平成11年度。国は、長引く経済不況により失業者が増加していることに鑑み、新たな雇用の創出をするべく『緊急地域雇用特別事業』を急遽事業化した。緊急地域雇用特別事業は、各市町村単位に実施される補助事業であり、その市町村内に居住する失業者を雇用するもので、上山田町では各課から提出された複数の事業案の中から、教育委員会の計画した「御屋敷遺跡報告書作成を目的とした出土土器の再整理」を『御屋敷遺跡出土資料整理事業』として事業化した。その事業費は、平成11年度が600千円、平成12年度が4,400千円であり、総事業費は5,000千円に及び、その８割以上を人件費として計上するものである。

本事業は町の直轄事業として実施できないため、社団法人更埴地域シルバー人材センター（以下　シルバーセンター）へ事業委託することとなった。しかしながら、シルバーセンターに登録できる年齢は65歳以上であり、今回の事業による「失業者の雇用創出」という概念からは程遠いものとなってしまうため、シルバーセンターと協議を重ねた結果、この事業に限り登録年齢を概ね40歳まで引き下げるという特例を設けていただき、シルバーセンターより職業安定所へ求人広告を出し、また町の広報等でも整理作業員を募った。

平成11年度分の事業については平成12年３月13日から３月27日まで行い、平成12年度分の事業については平成12年４月10日から実施し、９月27日をもって緊急地域雇用特別事業（御屋敷遺跡出土資料整理事業）に係る全ての整理作業を完了した。

２　整理調査体制

調査組織　　上山田町教育委員会

平成11年度		平成12年度		平成13年度	
教育長	宮原治介	教育長	山崎寛茂	教育長	山崎寛茂
		教育次長	矢島久良夫	教育次長	矢島久良夫
総務係長	渡島たか子	総務教育係長	宮原房江	総務教育係長	滝沢紀久子
学校教育係長	山崎幸重	社会教育係長	吉池伸光	社会教育係長	吉池伸光
主事	寺島孝典	主事	寺島孝典	主事補	平塚弘太
社会教育係長	吉池伸光	主事	小山　猛	公民館主事	寺島孝典

受託者　　社団法人　更埴地域シルバー人材センター　　理事長　宮原　良

整理作業従事者（平成11年度～12年度）

朝日奈富士子・沖田松子・荻原勝子・小黒裕章（11年度のみ）・諏訪はつ子・高橋元一

田島たか子・根本フミ子・古畑律子・宮越芳江（11年度のみ）・吉池たか子・若林安良

協力者

上山田町文化財調査委員会

委員長　宮原哲雄（八　坂）

副委員長　西沢一郎（中　央）

委　　員　山崎文雄（力　石）・田島速雄（三本木）・渡辺芳治（新　山　平成11年度）

北川泰男（新　山　平成12年度～）・山崎信夫（漆　原）・若林　眞（城　腰）

大竹俊正（温　泉　～平成12年度）・君島良博（温　泉　平成13年度）

3　整理の方法

再整理作業は、上山田町農業者トレーニングセンターの敷地内にある２棟のプレハブで行うことにしたが、内部には過去に調査された遺跡から出土した土器や石器をはじめ、木製品、敷石住居の礫、五輪塔などありとあらゆる遺物が無造作に保管されていた。また、収納された遺物が片方に偏り、基礎杭も腐食していたことからプレハブ全体が歪み、作業を行うには非常に無理のある状況であった。

そこでプレハブ内のもの全てをいったん屋外へ出し、床板をはいで歪んだプレハブの基礎と骨組みを造り直した。その後遺跡ごとに遺物を収納し、作業のできるスペースを確保した。

今回の再整理作業の過程は以下のとおりである。

(1)　土器洗浄作業

発掘調査により出土した土器のほとんどは既に洗浄され整理を受けていたが、千曲川水系古代文化研究所に未整理のまま残された土器も存在していたため、まずこれら土器を運び出し、洗浄することから開始した。

しかしながら、30年以上もビニール袋に入れられたまま放置された状態であったため、ビニール袋は劣化し、遺構別に複数の袋に分けられていた土器はコンテナの中で混在しており、また、仮にビニール袋の状態が良好であったとしても、当時付けられた荷札や直接ビニール袋に書かれた遺構名が解読不能になっているものが多く、そのほとんどが遺構名の解らぬ遺物となってしまっていた。

(2)　土器注記作業

土器への注記に際しては御屋敷遺跡の頭文字の『ＯＹ』を略号として用いた。

当初、住居番号については判別がつきやすいように再整理の際に新たな遺構名を付し、これに基づいた整理を行おうと考えたが、それぞれの住居番号が既に定着しており、混乱を招く恐れがあることから改めて付け直すことはせず、調査当時そのままの住居番号を用いた。

よって、例えばＹ１号住居の場合は『ＯＹＹ-１』、Ｈ１号住居の場合は『ＯＹＨ-１』という注記を行っている。

(3)　土器接合作業

先述したように、これまで未整理だった遺物については所属遺構が不明となっていたものが多く、接合作業においても苦慮した。そこで、既に整理を受けた土器も同時並行で再整理を行い、その接合関係から所属遺構の特定を試みたが、結果的にそれほど多くの接合関係は認められなかった。

また、既に整理を受け復元された土器についてもいったん分解し再度接合を行った。

(4)　土器復元作業

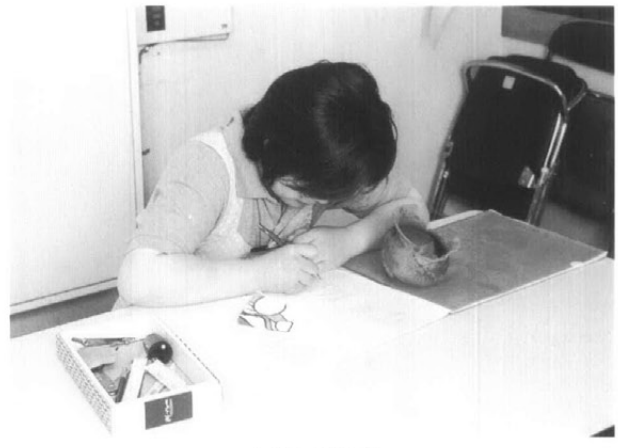
接合作業の結果、全体像が把握できるものあるいは必要に応じて、欠損部分を石膏によって補った。

(5)　土器実測

上記作業が終了したものから実測作業に入った。

従来図化されていた土器はもちろんのこと、再整理作業により新たに接合関係が認められた土器、あるいは同一個体として把握できた土器も含め、全てを再実測した。また、御屋敷遺跡で採集され上山田小学校に保管されていた土器も掲載の対象とした。しかし、長い年月の間に紛失し行方不明となってしまった土器もあり、従来図化されていた土器全てを掲載するにはいたらなかった。

土器洗浄作業



土器実測作業

土器拓本作業

土器拓本作業

整理作業員の皆さんと文化財調査委員の皆さん（入山城本郭にて）

第II章　上山田町の遺跡と分布

上山田町には土器などの遺物が採集できる場所が多く、遺跡の存在は古くから周知されており、昭和38年に刊行された上山田町史にも多くの遺跡が紹介されているが、本格的に遺跡分布の把握に努めたのは森嶋稔が中心となって行った踏査によってであった。

遺跡は主に山間部に集中し、現在広大な水田地帯となる三本木・力石地区には平安水田（条里制水田跡）が展開していることが明らかとなったその成果は、昭和59年に国及び町指定文化財の所在地とともに「上山田町の遺跡」として発行されている。その後実施された数々の発掘調査により遺跡範囲や内容に変更（平成８年一部改正）はあるが、この遺跡分布図が上山田町の文化財保護行政の一翼を担っていたことは言うまでもない。

ここでは、これまでに発掘調査された遺跡を中心に上山田町内に分布する遺跡を時代ごとに概観する。

1　縄文時代以前

縄文時代以前の遺跡として明確に判断できる遺跡は少なく、そのほとんどが遺跡分布図作成時の踏査等に基づく分布となっている。

分布調査によると、主に山間部を中心に縄文時代以前の遺物が採集できる場所が散布地として何か所か存在している。正式な発掘調査を経て得られた資料ではないので、どのような性格の遺跡かは判断しかねるが、それぞれの立地条件から考えると集落もしくは居住域としての生活空間が大規模に展開している可能性は極めて低い。

新屋遺跡（Ａ－11）は千曲川を望む断崖上の遺跡で後期初頭住居跡２軒が検出されている。いずれも床面に石が敷かれたいわゆる敷石住居であり、１号住居は柄鏡形となる。

また、堀之内遺跡（Ａ－23）からは遺構には伴わないが前期初頭の穿底土器、力石条里遺跡群（Ｃ－①）からはこれも遺構に伴うものではないが後期及び晩期の土器がそれぞれ出土している。

2　弥生時代

力石条里遺跡群は千曲川の氾濫により形成された後背湿地と自然堤防（微高地）からなる遺跡で、現在、広大な水田地帯と力石集落の範囲にあり、微高地は力石集落を中心に展開している。

その微高地上に展開する西沖遺跡（Ａ－42）では、道路建設工事等の掘削の際に多量の箱清水式土器が出土したと伝えられ、薬師堂遺跡（Ａ－44）の発掘調査では中期後半から後期後半の集落が検出されている。また、桜宮遺跡（Ａ－43）からも中期後半から後期後半の土器が表面採集されていることから、微高地上一帯に居住域が展開していると考えられる。

力石条里遺跡群ではこれまでトレンチ状の調査しか行っていないため全体の様子は不鮮明であるが、後背湿地内にも部分的に点在する微高地を利用した居住域が存在している可能性があり、岩井堂山麓付近からは前述した縄文後・晩期土器群のほかに弥生中期初頭の条痕文系土器も出土している。また、磨製石包丁の出土や栗林式土器を出土する矢板を伴う水路跡など、弥生水田の存在を思わせるような遺構や遺物が検出されており、薬師堂遺跡と桜宮遺跡の弥生中期後半集落とともに一連の生活空間として捉えることができる大変興味深い遺跡群である。

堀之内遺跡からは箱清水式期の土器棺墓１基と土壙が２基検出されている。土器棺墓は大型の甕に壺の胴下半部を合わせ口にしたもので、玉類等の副葬品は認められない。また、２基の土壙もその形状から土壙墓もしくは木棺墓が予測でき、墓域が展開しているものと思われる。

3　古墳時代

町内には、過去に40基以上の古墳が存在していたとされているが、宅地あるいは畑地の造成時に破壊されてしまったものが多く、現存している古墳は18基にすぎず、そのほとんどが既に盗掘を受けている。

堂上古墳（B－10）は直径20m程を測る円墳で当町最大の古墳であるが、墳丘裾は墓地として破壊されてしまい、また一部墳丘の崩落が進んでおり、早急に保護措置を検討しなければならない。

観音林古墳（B－16）は当町で唯一横穴石室が開口する円墳であるが、宅地造成により羨道部は破壊され玄室のみが残存している。墳丘もかなり削られており裏込め石も露呈しているため石室の崩壊も今後予想されることから、何かしらの対応が必要である。なお石室内部からは直刀や土師器が出土したとされる。

金比羅山山頂に築かれた金比羅山古墳（B－08）は墳頂部に盗掘による大きな陥没が見られる。また墳丘の4分の1程は公園の造成により破壊されてしまっている。埋葬施設は横穴石室を用いているものと考えられるが、造成により削られた部分からはその存在を思わせる遺構はみあたらない。この古墳からは須恵器の長頸壺が出土したと伝えられ、現在上山田小学校で保管されている。

堀之内遺跡からは中期集落が検出されている。主に6世紀代の住居跡であり、6号住居跡からは石製模造品が出土している。その他に3箇所の集石遺構があり、2号集石遺構からは古式須恵器が3点出土し、2号集石と3号集石とは同時期と捉えて差し支えないものと思われる。

その昔調査地付近には古墳が存在していたと伝えられている。これら集石遺構をその古墳と結びつける積極的な材料はないが、3号集石遺構などは円形に配列しているようにも見え、積石塚とまでは言わないものの、古墳に伴う集石と考えることもできよう。

薬師堂遺跡からは前期の集落が検出されている。住居跡から出土した土器には依然として在地の様相が色濃く残っているものの、既に東海や北陸など外来系統の土器に影響を受けた土器が主体を持ち始め、土器形態に強い変化が認められる。また2号溝状遺構からは高坏や小型丸底が多く出土しており、報告書の中では特に触れてはいないが遺構の形状から方形周溝墓を想定する。

4　奈良時代以降

奈良時代以降の遺跡は町内に多く点在し、弥生時代あるいは古墳時代の遺跡と複合していることが多い。

釜屋遺跡（A－21）をはじめ、前掲の堀之内遺跡や力石条里遺跡群などでも小規模ながら集落が検出され、概ね8世紀から12世紀にいたる集落が数多く展開している様子がうかがえる。また、日影沢川沿いには9世紀から11世紀にかけて使用されたと見られる須恵器窯跡、鍛冶在家窯跡（E－01）もある。

町内には中世戦国時代の山城や狼煙台、居館跡が数多く存在する。

上山田町の北部、戸倉町との町境に接する城山山頂に築かれた荒砥城跡（D－01）は、平成5年に城山史跡公園整備に伴う発掘調査が実施されたが、以前建設されていた建造物により遺構の大半が既に破壊を受けており、土塁の一部とその崩落を防ぐ裾石垣が僅かに検出された程度である。したがって、史跡整備により再現された建造物は発掘調査の成果に基づくものではない。

この荒砥城は冠着山の支尾根の突端部に築かれた山城で、冠着山へと向かう支尾根上にはいくつもの狼煙台が連なる。また、麓の城野腰遺跡（A－03）、二ノ入遺跡（A－04）のある緩斜面には荒砥城主である山田氏の居館跡が存在するとみられ、現在果樹園となっているこの地域からは中世遺物が数多く出土する。

入山城跡（D－05）は御屋敷遺跡の南側にある入山氏の居城で、4本の薬研状の空堀に、土塁が明瞭に観察できる5つの郭が連なり、これらの郭のほか数箇所に小さな郭も存在する非常に保存状態の良好な山城である。

なおこの城には、漆原地籍の向堤池（足跡池）から水を引き込んだという伝承がある。5つの郭の内、最も西側に位置する五の郭の中央には尾根から伸びる土塁状の盛土があり、その昔この盛土を割ったところその断面に円形の炭の痕跡があったという。木材を刳り貫いたものか竹を用いたものか定かではないが、もしこの話しが本当であれば大変興味深い。

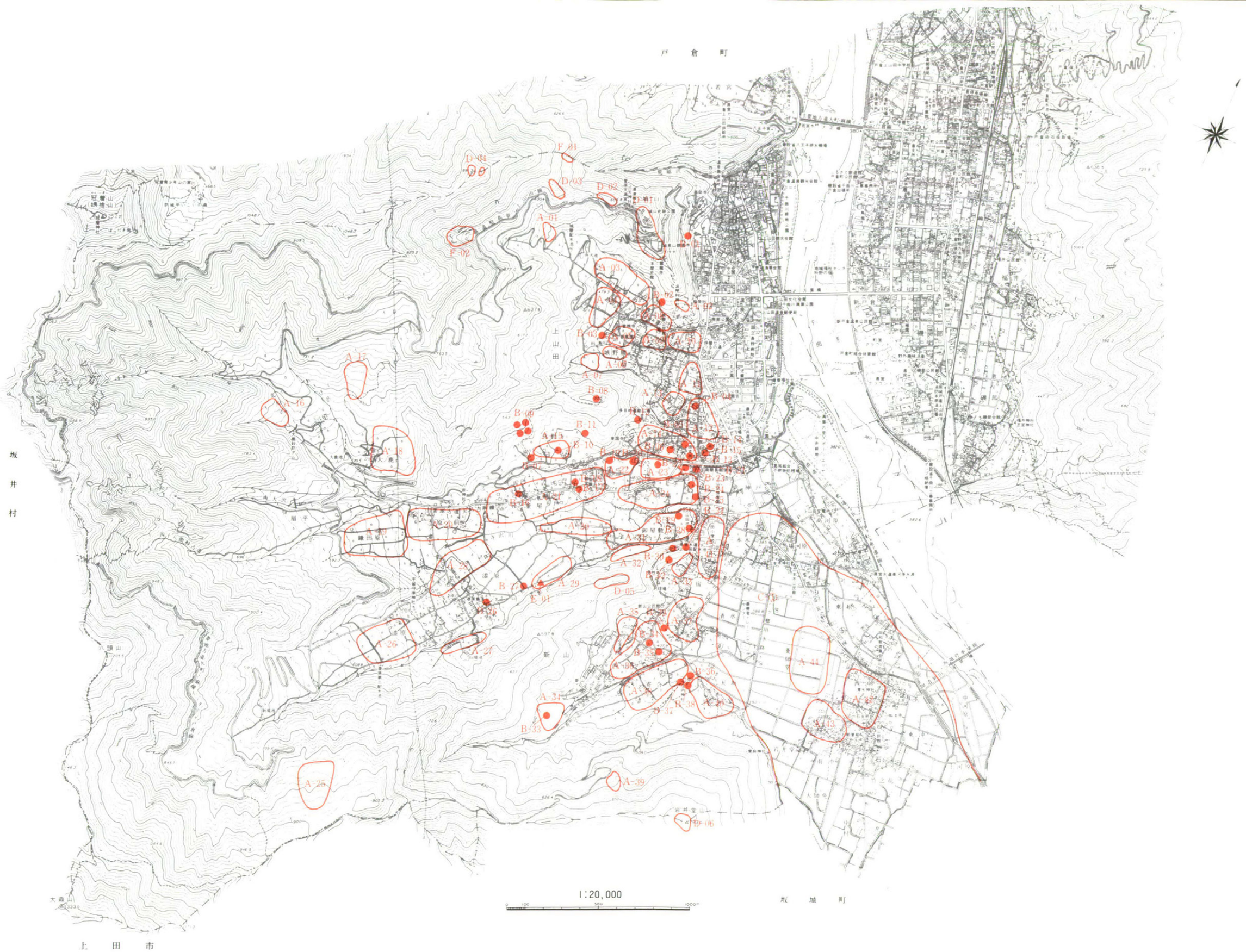
遺跡番号	遺跡名	ふりがな	時代	種別	備考
A－01	御林遺跡	みはやし	縄文	散布地	
A－02	波閇科神社裏遺跡	はべしなじんじゃうら	古墳～平安	散布地	祭祀跡？
A－03	城野腰遺跡	しろのこし	古墳～中世	集落	居館
A－04	ニノ入遺跡	にのいり	平安～中世	集落	
A－05	天神原遺跡	てんじんばら	古墳～中世	集落	
A－06	平野遺跡	ひらの	古墳～平安	集落	
A－07	法華寺遺跡	ほっけじ	平安～中世	散布地	寺院跡
A－08	尾平遺跡	おだいら	古墳～平安	集落	
A－09	大門遺跡	だいもん	古墳～中世	集落	
A－10	田島遺跡	たじま	縄文～中世	集落	
A－11	新屋遺跡	あらや	縄文～平安	集落	昭和62年度調査
A－12	宿遺跡	しゅく	弥生～中世	集落	
A－13	和合遺跡	わごう	古墳～平安	集落	
A－14	水上遺跡	みずかみ	弥生～中世	集落	
A－15	弥勒寺遺跡	みろくじ	古墳～平安	散布地	弥勒堂跡
A－16	古屋遺跡	ふるや	平安～中世	集落	居館・寺院跡
A－17	水神平遺跡	すいじんぴら	縄文・平安	散布地	
A－18	大鹿遺跡	おおが	縄文～中世	集落	
A－19	鎌田原遺跡	かまたばら	縄文～中世	散布地	
A－20	原ノ前遺跡	はらのまえ	縄文～中世	散布地	
A－21	釜屋遺跡	かまや	縄文～中世	集落	昭和48年度調査
A－22	牧ノ内遺跡	まきのうち	古墳～中世	集落	
A－23	堀之内遺跡	ほりのうち	古墳～中世	集落	昭和58年度調査
A－24	羽場遺跡	はば	弥生～中世	集落	
A－25	穴場遺跡	あなば	縄文	散布地	
A－26	山ノ神遺跡	やまのかみ	縄文～中世	集落	
A－27	堤林遺跡	つつみばやし	平安～中世	散布地	
A－28	漆原遺跡	うるしばら	平安～中世	散布地	
A－29	鍛冶在家遺跡	かじざいけ	古墳～平安	散布地	
A－30	カロオケ遺跡	かろおけ	古墳～中世	集落	
A－31	御屋敷遺跡	おやしき	縄文～中世	集落	昭和45年度・平成７年度調査
A－32	日影遺跡	ひかげ	古墳～中世	散布地	
A－33	新山・宿遺跡	あらやま・しゅく	古墳～中世	集落	
A－34	荒神原遺跡	こうじんばら	縄文～平安	散布地	
A－35	堂前畑遺跡	どうまえばた	弥生～平安	集落	
A－36	西山遺跡	にしやま	縄文～平安	集落	
A－37	清水遺跡	しみず	平安～中世	集落	
A－38	寄合遺跡	よりあい	平安～中世	集落	居館
A－39	御局遺跡	おつぼね	中世	散布地	
A－40	天坂遺跡	あまさか	平安～中世	集落	
A－41	三本木遺跡	さんぼんぎ	古墳～中世	散布地	
A－42	西沖遺跡	にしおき	弥生～中世	集落	
A－43	桜宮遺跡	さくらのみや	弥生～中世	集落	
A－44	薬師堂遺跡	やくしどう	弥生～中世	集落	平成２年度調査
遺跡番号	遺跡名	ふりがな	備考		
B－01	城山裏古墳	じょうやまうら	破壊		
B－02	宮沢川古墳	みやざわがわ	破壊		
B－03	天神原古墳	てんじんばら			

第１表　上山田町内遺跡一覧表①

遺跡番号	遺跡名	ふりがな	備考
B－04	清水坂古墳	しみずざか	
B－05	水上一号墳	みずかみいちごう	
B－06	水上二号墳	みずかみにごう	破壊
B－07	弥勒寺古墳	みろくじ	
B－08	金比羅山古墳	こんぴらやま	町指定史跡
B－09	四ツ塚古墳群	よつづか	4基群集　町指定史跡
B－10	堂上古墳	どうのうえ	町指定史跡
B－11	富士塚古墳	ふじづか	破壊
B－12	東国寺裏古墳	とうこくじうら	
B－13	藤木塚古墳	ふじきづか	破壊
B－14	丸山古墳	まるやま	
B－15	丸山南古墳	まるやまみなみ	
B－16	観音林古墳	かんのんばやし	横穴式石室　町指定史跡
B－17	釜屋一号墳	かまやいちごう	町指定史跡
B－18	釜屋二号墳	かまやにごう	破壊
B－19	牧ノ内古墳	まきのうち	
B－20	女涙坂古墳	おなみざか	破壊
B－21	堀之内一号墳	ほりのうちいちごう	破壊
B－22	堀之内二号墳	ほりのうちにごう	破壊
B－23	山伏塚古墳	やまぶしづか	
B－24	羽場一号墳	はばいちごう	破壊
B－25	羽場二号墳	はばにごう	破壊
B－26	富田入古墳	とみたいり	破壊
B－27	姥塚古墳	うばづか	破壊
B－28	御屋敷一号墳	おやしきいちごう	破壊
B－29	御屋敷二号墳	おやしきにごう	破壊
B－30	天神山古墳	てんじんやま	破壊
B－31	越道山古墳	こえどうやま	破壊
B－32	越道古墳	こえどう	破壊
B－33	荒神原古墳	てんじんばら	破壊
B－34	西山古墳	にしやま	破壊
B－35	三昧古墳	ざんまい	破壊
B－36	寄合古墳	よりあい	破壊
B－37	矢塚古墳	やつか	破壊
B－38	矢塚南古墳	やつかみなみ	破壊
B－39	清水古墳	しみず	破壊

遺跡番号	遺跡名	ふりがな	時代	種別	備考
C－①	力石条里遺跡群	ちからいしじょうり	縄文～中世	水田・集落	昭和63年度・平成元・2年度調査
D－01	荒砥城跡	あらとじょう	中世	山城	町指定史跡
D－02	荒砥小城跡	あらとしょうじょう	中世	山城	町指定史跡
D－03	若宮入山城跡	わかみやいりやまじょう	中世	山城	町指定史跡
D－04	證城	しょうじょう	中世	山城	町指定史跡
D－05	入山城	いりやまじょう	中世	山城	町指定史跡
D－06	出浦城	でうらじょう	中世	山城	町指定史跡
E－01	鍛冶在家窯跡	かじざいけかまあと	窯跡	平安	
F－01	銀座洞穴跡	ぎんざどうけつ	鉱山	近世	
F－02	御林石切場跡	みはやしいしきりば	鉱山	近世	

第2表　上山田町内遺跡一覧表②



第１図　上山田町の遺跡分布図（１：20,000）

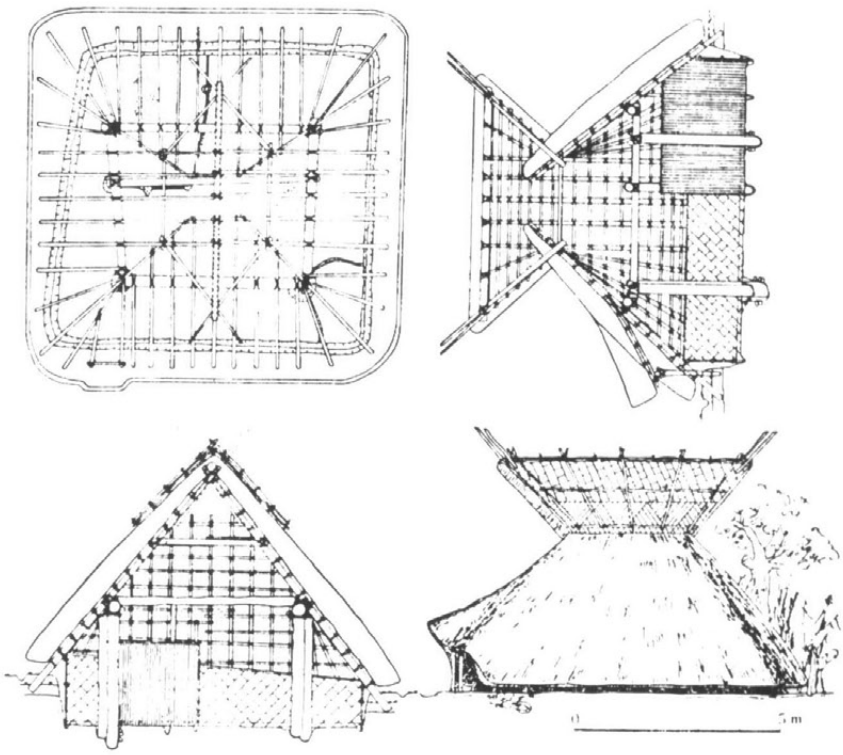
第Ⅲ章　調査成果

Ｙ１号住居

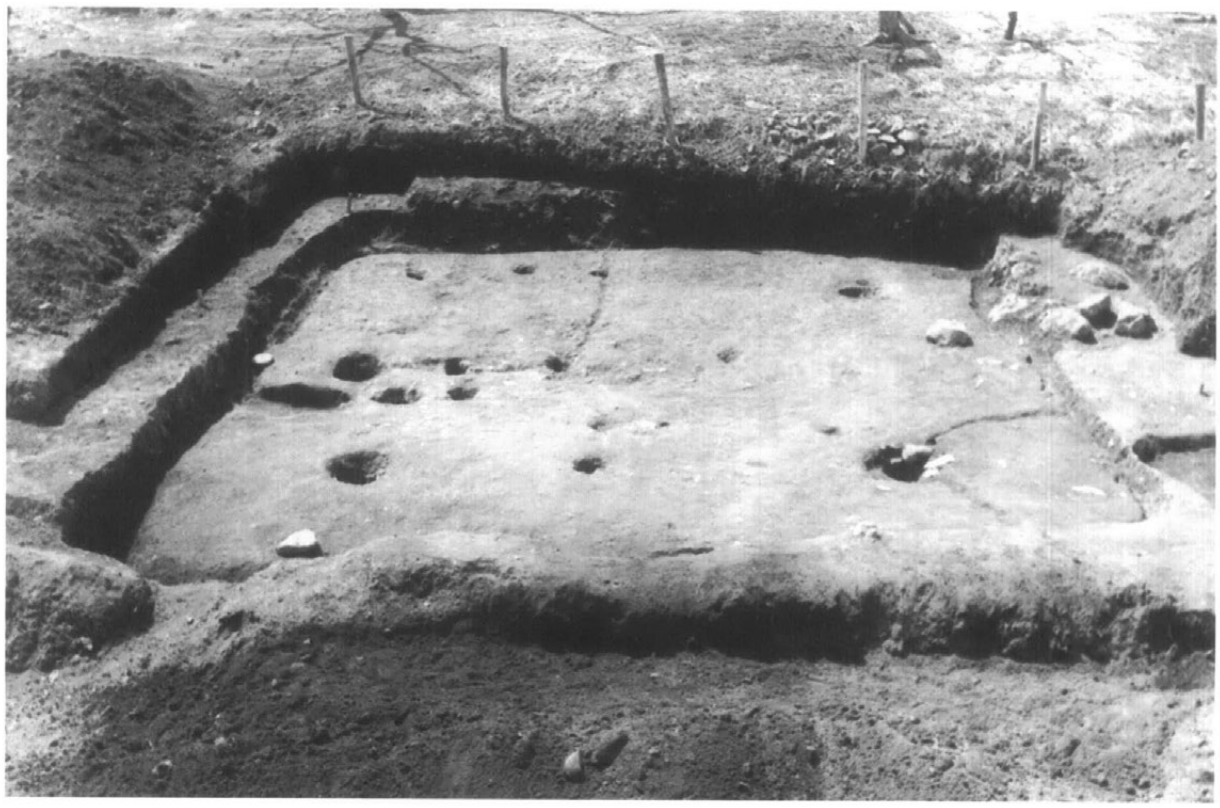
調査区の南隅に検出され、Ｙ２号住居と重複関係を持つ。今回の調査で住居全体が把握できた数少ない住居跡の一つで、更級埴科地方誌原始古代中世編では検出された内部施設などの情報をもとに家屋の復元［第２図］を行っている。

１辺８ｍ程を測るほぼ正方形の大型住居で、北側主柱穴間に地床炉をもつ。主柱穴は４本の方形配列となり、床面は全体に非常に堅緻であるが凹凸が激しい。床面壁際には壁溝がめぐり、所々に間仕切り溝が数本掘られている。

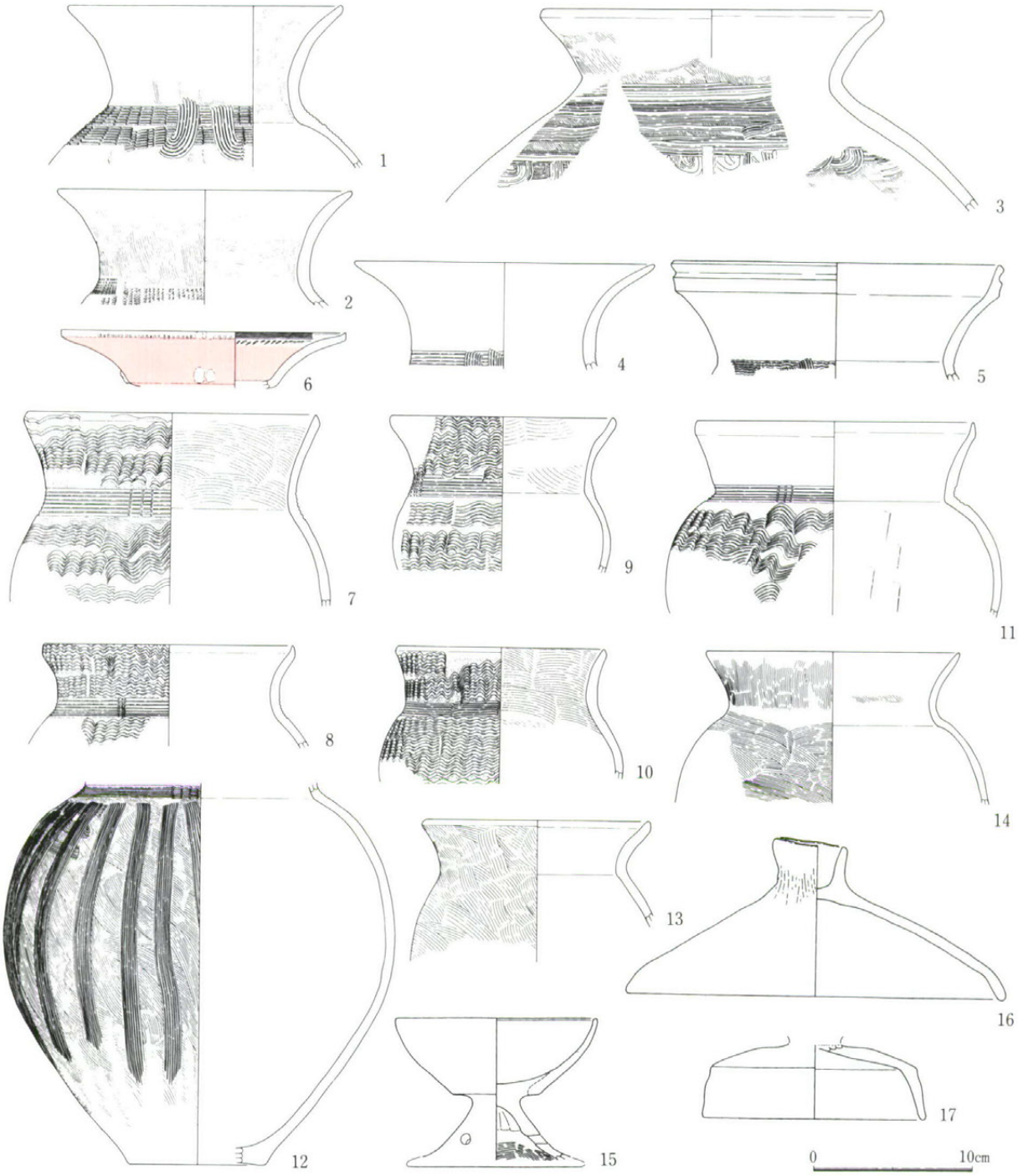
出土土器［第３図］には壺（１～６）、甕（７～14）、器台（15）、蓋（16・17）がある。



第２図　Ｙ１号住居復元図



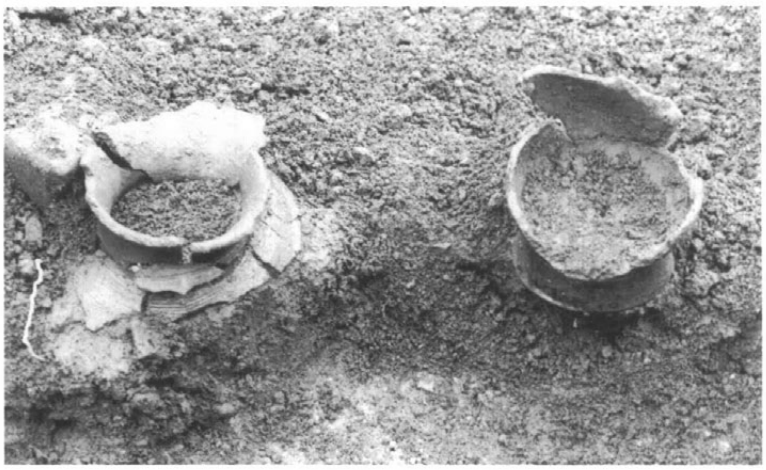
Ｙ１号住居



第３図　Ｙ１号住居出土土器

１は頸部に簾状文を２段に配した後、垂下させた櫛描文を端部において反転させたいわゆるＪ字文を施文する。Ｊ字文は２ヶ１単位で３箇所に施文されている。口縁部及び胴部はハケを施した後縦方向のヘラミガキにより器面調整を行っているが、この時期特有の赤彩は行われていない。２は頸部に刺突のような短い間隔の簾状文を施す。３はかなり乱雑な櫛描直線文が３段から４段施文され、その下部に連弧文を施す。破片資料のため全体の様子は判然としないが、比較的大型の壺で、土器形態も文様形態も在地のものとは違う異色な土器である。４は頸部におそらくＴ字文を施しているものと見られるが、赤彩はされない。５の口縁端部は強いヨコナデにより整形されており、断面がＳの字のような形となる。頸部には波状文と直線文との組み合わせによるＴ字文が施文され、

垂下される櫛描文は２ヶ単位となる。内外面ともにヘラミガキによる器面調整のみであり、赤彩はされない。６は口縁部のみの破片であるため全体はわからないが、おそらく頸部が直立し球形の胴部を持つような形態の壺と思われる。口縁端部は面取りされ、その端部にキザミが巡る。端部と有段部分には２ヶ単位の楕円形の貼付が４箇所ずつ配されているが、欠落している箇所が目立つ。内面の口縁端部には細かな波状文とキザミが巡らされ、内外面ともに赤彩される。



Ｙ１号住居土器出土状況

７の口縁端部には緩い面取りがされ、口縁部及び胴部に波状文を施文した後頸部に簾状文を施す。８・９の口縁端部は僅かに内湾し、頸部に簾状文を施文した後波状文を施す。10は口縁端部が面取りされ、頸部へ簾状文の後波状文を施文する。11は頸部に簾状文、胴部に波状文が施文されるが、口縁部には文様はない。12は頸部に簾状文が施され、頸部から胴部にかけて櫛描文が垂下される。頸部簾状文下に波状文が３段施文されているが、一部のみで全周はしない。13及び14はハケ調整のみで文様はない。15は脚端部が欠損しているのみでほぼ完形となる。坏部は内外面ともに横方向の丁寧なヘラミガキが施され、有段となる。脚部には３箇所に円孔が穿たれ、縦方向のヘラミガキを施すがハケ調整痕が残る。16のつまみ部には絞りによるしわが残り、その他の部分はヘラミガキによる。17は全体に丁寧なヘラミガキが施される。

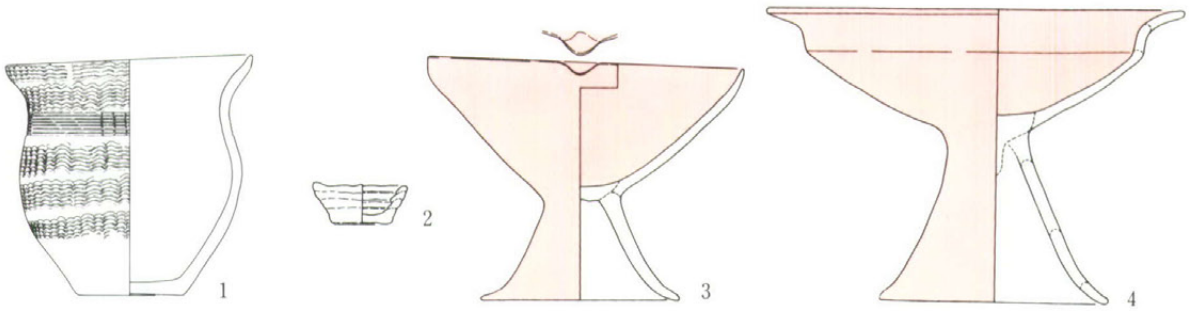
Ｙ２号住居

調査区の南隅に検出され、Ｙ１号住居と重複関係を持つ。住居東側は調査区域外となり、既に破壊を受けているため全体の半分以下が検出された程度である。よって住居形態は判然としないが、長方形住居を想定する。柱穴は２基検出され、その柱穴間には地床炉があり床面は全体に堅緻である。

土器は床面から３点の完形に近い土器［第４図］が出土したほかはほとんどが覆土よりの出土であり、小破片であるため図化することはできなかった。出土土器には甕（１）と坏形の手づくね土器（２）、高坏（３・４）がある。

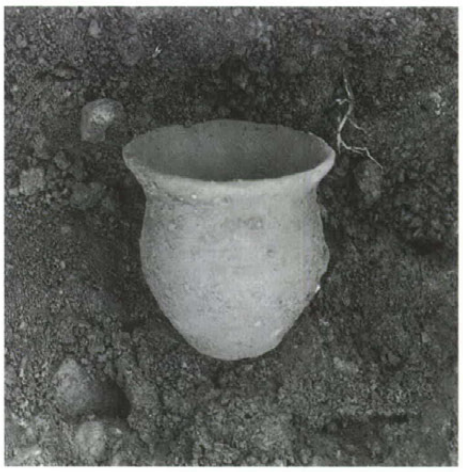
１は小型で、頸部に簾状文が施文された後、口縁部と胴部に波状文が施文される。内面は丁寧なヘラミガキにより仕上げられ、外面も底部付近にヘラミガキの痕跡が残るものの、器面が荒れており詳細については不明である。口縁端部は強い横ナデがされ僅かに内湾する。２は坏状の手づくね土器で、輪積みされた粘土紐が残る。３・４は全面に赤彩され、丁寧にヘラミガキされる。３の口縁部には１箇所注ぎ口のつまみ出しがある。４は坏部に段を持つ。

Ｙ２号住居

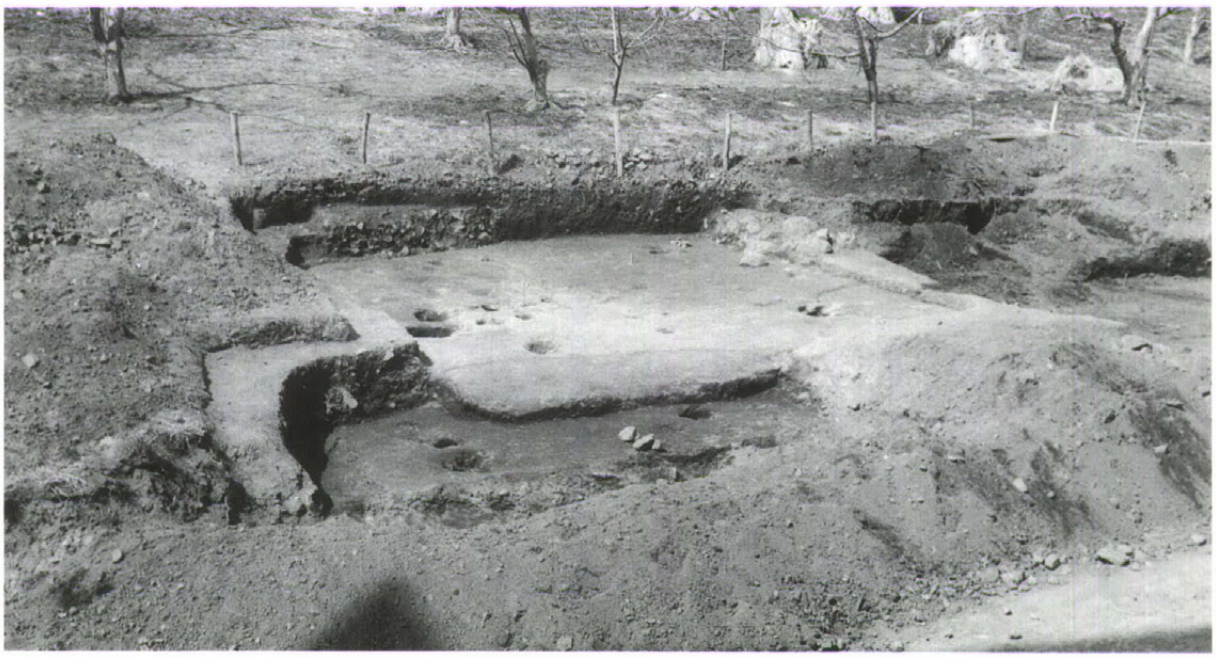


第４図　Ｙ２号住居出土土器

住居検出状況



土器出土状況



Ｙ１・Ｙ２号住居付近

Ｙ３号住居

Ｙ４号住居、Ｈ７号住居と重複関係にあり、住居のほとんどを破壊されているため、住居の規模や形態について判然としない。出土土器に関しても箱清水式土器が僅かながら出土しているものの、全て小破片で図化しうるものはない。

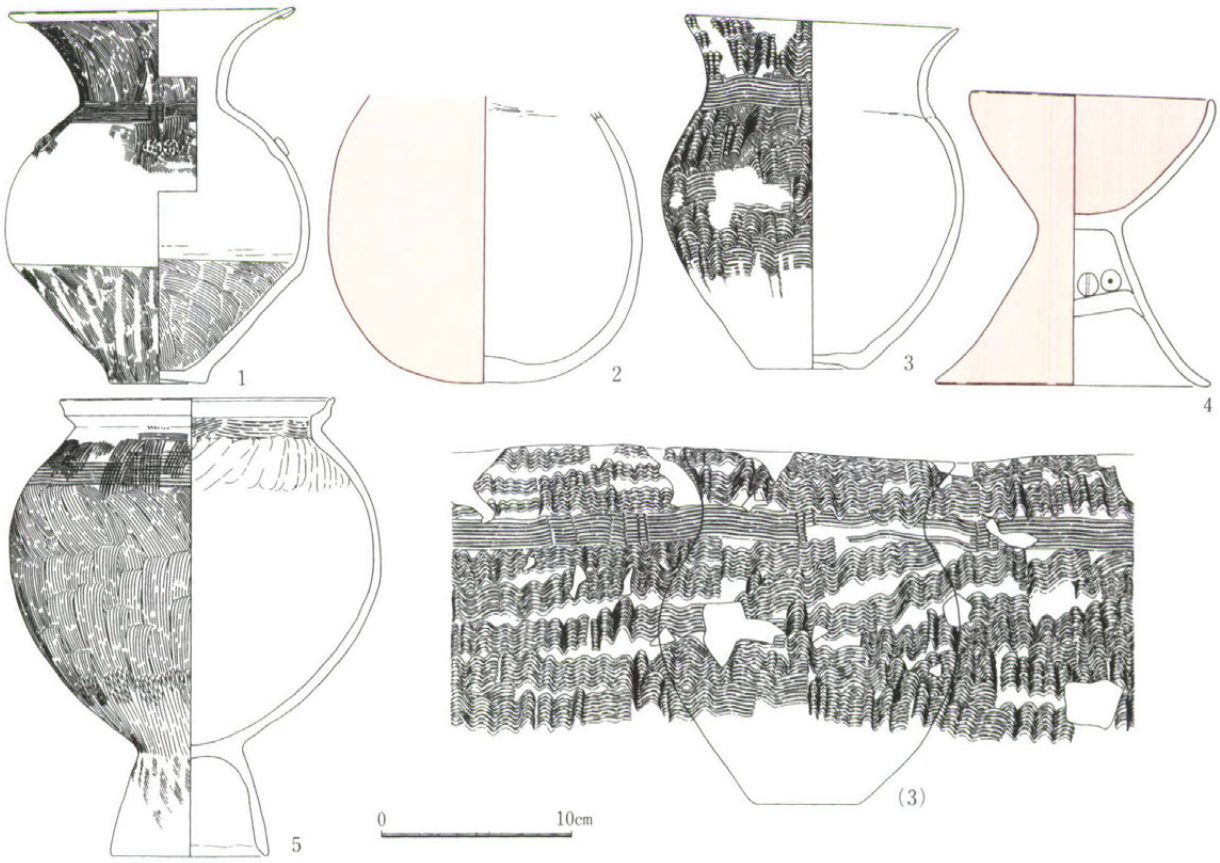
Ｙ４号住居

Ｙ３号住居を破壊して構築され、Ｈ１・Ｈ７号住居に破壊を受けている。住居の南の一部が調査されただけであり、内部施設も検出されず遺物の出土は多くないが、住居隅に築かれた貯蔵穴と思われる内部から、石に蓋をされるような形で５点の完形に近い土器が出土している。

Ｙ４号住居土器出土状況

出土土器［第５図］には、壺（１・２）、甕（３）、器台（４）、台付甕（５）がある。

１の口縁端部は折返しがされ、頸部に簾状文を施文した後２条単位で櫛描文を垂下させるＴ字文となり、その端部に表面に無数の刺突のあるボタン状の円盤が貼付されている。胴下半部には稜をもち、全体にヘラミガキが丁寧に施されるが赤彩はされない。２の底部は丸底であるが厚くつくられており非常に安定感のある土器となる。口縁部は欠損しており全体の器形は判然としないが、残存する胴部の状況から大きく外反する口縁とはならないとみられる。外面は全体が丁寧にヘラミガキされ、赤彩が施される。内面はナデ成形であるが、頸部付近には板ナデのような細かいスジが見られる。３は全面にハケにより整形された後頸部



第５図　Ｙ４号住居出土土器

に簾状文を施し、波状文を施文する。外面は底部付近のみ丁寧にヘラミガキされ、内面は全体がヘラミガキされる。４の外面は全面が赤彩され坏部及び脚端部については横方向、脚部は横方向のヘラミガキがされるが、赤彩の大部分が剥げ落ちている。坏部の内面も赤彩がされ横方向のヘラミガキを施す。脚部の内面には粘土により密封された空間が存在し、内部には土製の玉が２つ封入されており、この器台を振ると「カラカラ」と音が鳴る。土製の玉は直径１㎝前後の小さなもので、それぞれ穿孔されている。５はいわゆるＳ字状口縁台付甕で、口縁端部は強いヨコナデにより整形され明瞭なＳ字をつくり出している。頸部付近は細かなハケ、胴部は荒いハケと工具を使い分けており、頸部は斜方向にハケを施したのち横方向のハケが一周している。内面は頸部にハケがみられるのみで、全体はナデによって調整されている。胴部上半には指圧によるものとみられるナデの凹凸があり、下半部分は煤が付着している。台部の端部は弱いながらも折返しがされている。

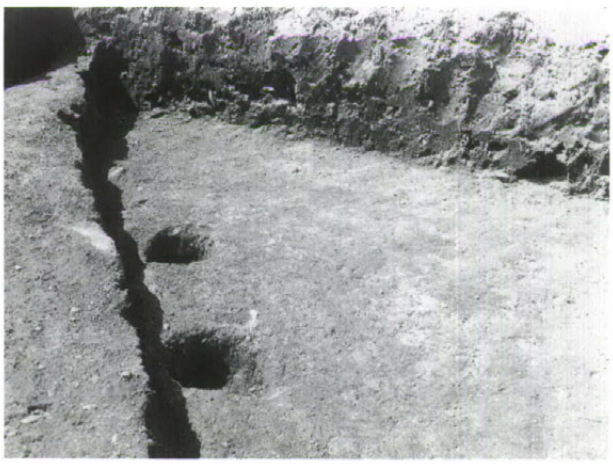
Ｙ５号住居

調査区の最も西に検出された住居で、西側は調査区外により検出されなかったが、範囲内では1/3程度が検出できたものと見られ、その形態から長方形の住居を想定する。

内部施設については、柱穴が４本検出されているが、その内、南壁際に２本並んだ柱穴は、出入口施設に伴う柱穴と思われる。床面は全体において非常に堅緻であるが、壁際は僅かながら軟弱となる。床面の所々に炉とは異なった火床が見られるものの、住居自体に焼失した痕跡は見られず、また、炭化材などの出土も確認されていない。

住居は比較的良好に検出できたが、出土遺物に関してはほとんどなく、箱清水式土器が小破片出土したのみで、図化できるものはなかった。

Ｙ５号住居検出状況

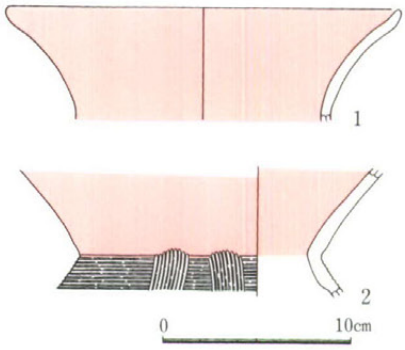


出入口検出状況

Ｙ６号住居

H12号住居と重複関係にあり、住居のほとんどを破壊されている。住居形態は長方形を呈しており、主柱穴は４本の長方形配列となる。炉は北側主柱穴間に築かれ、地床炉となる。

土器は覆土を中心に多く出土しているが、ほとんどが小破片であり図化できたものは２点［第６図］にすぎない。出土土器には壺（１・２）がある。１の口縁端部は僅かに内湾し、内外面ともに赤彩され、外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキが施される。２は頸部にＴ字文が施文される。口縁部は内外面ともに赤彩され、外面は縦方向、内面は横方向にヘラミガキされる。



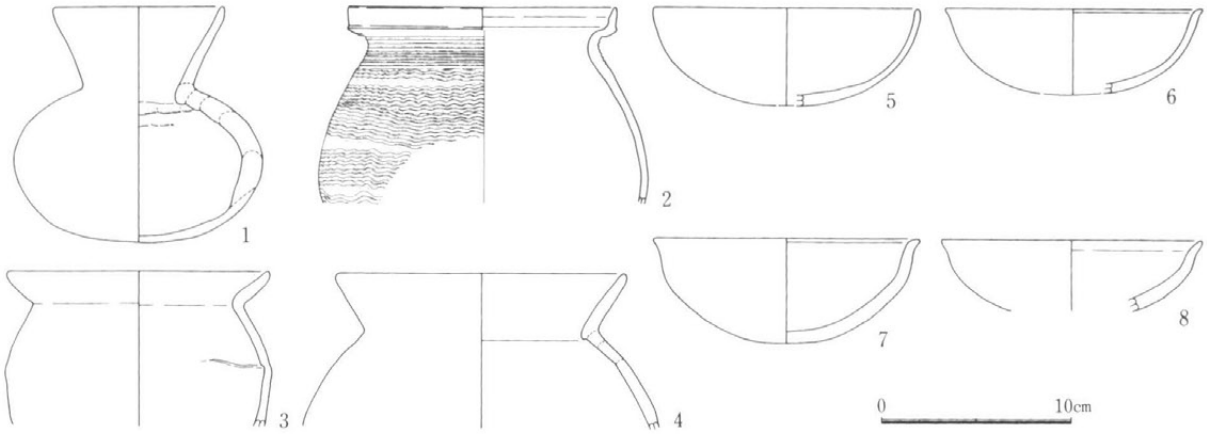
第６図　Ｙ６号住居出土土器

Ｈ１号住居

Ｙ１号・Ｙ４号住居と重複関係にある。一辺４ｍ程の正方形を呈した住居であるが、内部施設については全く検出されていない。

出土土器［第７図］には壺（１）、甕（２～４）、坏（５～８）がある。１の口縁端部は強いヨコナデにより整形され僅かながら内湾する。体部外面は横方向のヘラミガキが施され、内面は主にナデにより調整される。２は強いヨコナデにより受け口状の口縁となり、胴部に波状文を施文した後、頸部に直線文を施文する。

Ｈ１号住居付近



第７図　Ｈ１号住居出土土器

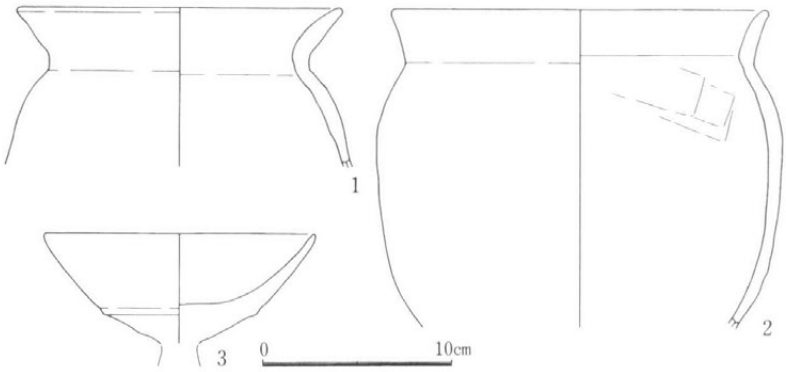
Ｈ２号住居

Ｙ１号住居の上面で検出された長辺４ｍ、短辺３ｍ程の長方形を呈する。内部施設については柱穴らしい掘り込みが３本検出されたが配列は不規則で、土器等の遺物の出土もないため、住居遺構として特定できないかもしれない。

Ｈ３号住居

調査区南端に検出された住居で、Ｙ１号住居と重複関係にある。

出土土器［第８図］には甕（１・２）と高坏（３）がある。１は全体がナデにより整形されているが、頸部の一部にヘラミガキがされる。２は内外面がナデにより整形されており、胴上半部には板ナデが施される。３は全体に丁寧な縦方向のヘラミガキが施されている。



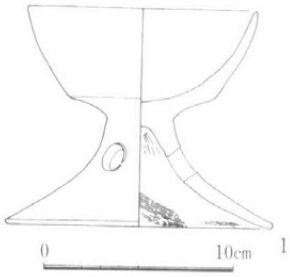
第８図　Ｈ３号住居出土土器

Ｈ４号住居

調査時の記録では当該遺構は平安時代の住居とされているが、再整理行においてこの住居の遺物として取り上げられている遺物はほとんど存在しない。

出土土器［第９図］は器台が１点図化できただけである。

坏部には段を持ち、外面は横方向のヘラミガキが丁寧に施され、内面は放射状に磨かれる。脚部には３つの円孔が穿たれ、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は軽いハケ調整の後ナデを行っている。脚端部には面取りが施される。



第9図　Ｈ４号住居出土土器

Ｈ５号住居

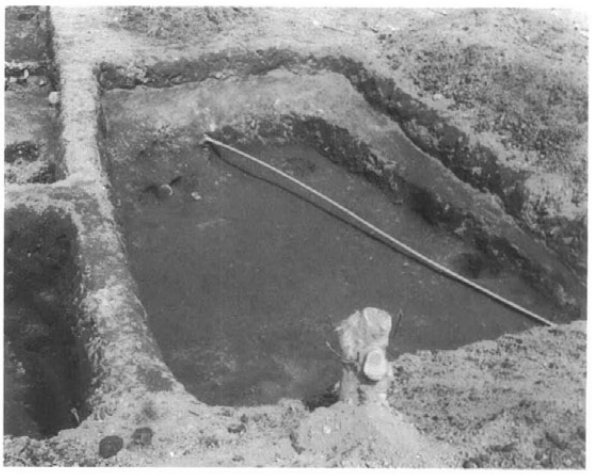
Ｙ５号住居の南隅に僅か住居のコーナーが検出されたのみである。よって当遺構が住居である確証はなく、遺物の出土もないため時代もはっきりとしない。

Ｈ６号住居

Ｈ９号住居と重複関係にあり、北西壁中央にカマドを持ち長辺5.30ｍ、短辺３ｍと小さな住居である。

出土土器［第10図］には須恵器坏（１～３）、須恵器蓋（４）がある。

坏はロクロナデによる器面の凹凸が著しい。底面は回転糸切りである。蓋はつまみ部が蓋面に密着し持ちづらい。

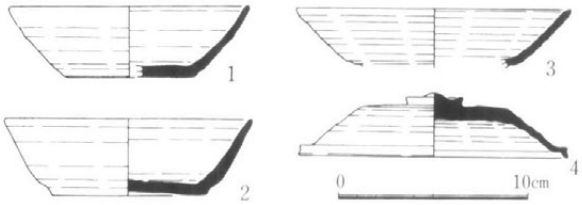

Ｈ６号住居

Ｈ７号住居

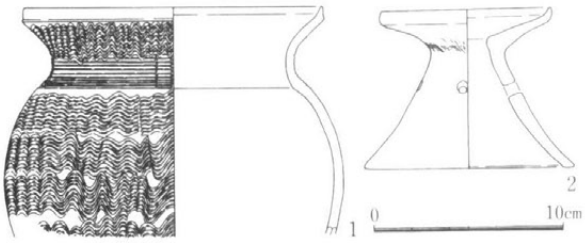
Ｙ３・４号住居及びＨ８号住居と重複関係にあり、住居のほとんどが破壊され住居形態は判然としないが、長方形を呈するものと思われる。調査において内部施設は全く検出されておらず、遺物の出土も多くないが弥生時代後期の住居を想定する。

出土土器［第11図］には甕（１）と器台（２）がある。

１は頚部に簾状文が施されたのち口縁部と胴部に波状文が施文される。口縁端部は強いヨコナデによって摘み上げられ受口状を呈している。内面は全体がナデにより調整される。２は口縁端部が受口状となり、脚部には４つの円孔が穿たれている。外面は全体にヘラミガキが施されている。内面は主にナデによるものである。



第10図　Ｈ６号住居出土土器



第11図　Ｈ７号住居出土土器

Ｈ８号住居

Ｈ７号住居と重複関係にあり住居のほとんどは調査区域外のため調査されていない。遺物の出土もないため住居の時代も特定できていない。

Ｈ９号住居

Ｈ６・13・19住居と重複関係にあり、各住居によりほとんどが破壊されているため住居形態や時代については不明である。

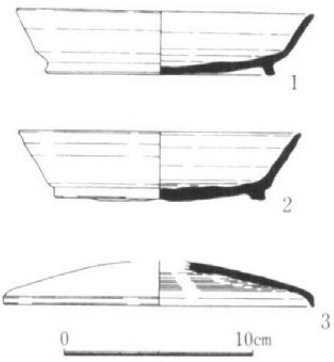
H11号住居

他遺構との重複はないが住居の全体を調査するにはいたっていない。西壁中央にカマドがあり、その両脇に柱穴と思われる掘り込みが検出されている。遺物の出土もなくはっきりとしないが平安時代の住居と思われる。

H12号住居

Y6号住居を破壊して構築される住居で、長辺7.10m、短辺6mを測る長方形の住居を呈し、北西壁中央にカマドがある。住居の各隅には柱穴が検出されている。住居全体を良好に確認できたものの、遺物の出土は多くない。

出土土器［第12図］には坏（1・2）と蓋（3）がある。



第12図　H12号住居出土土器

H13号住居

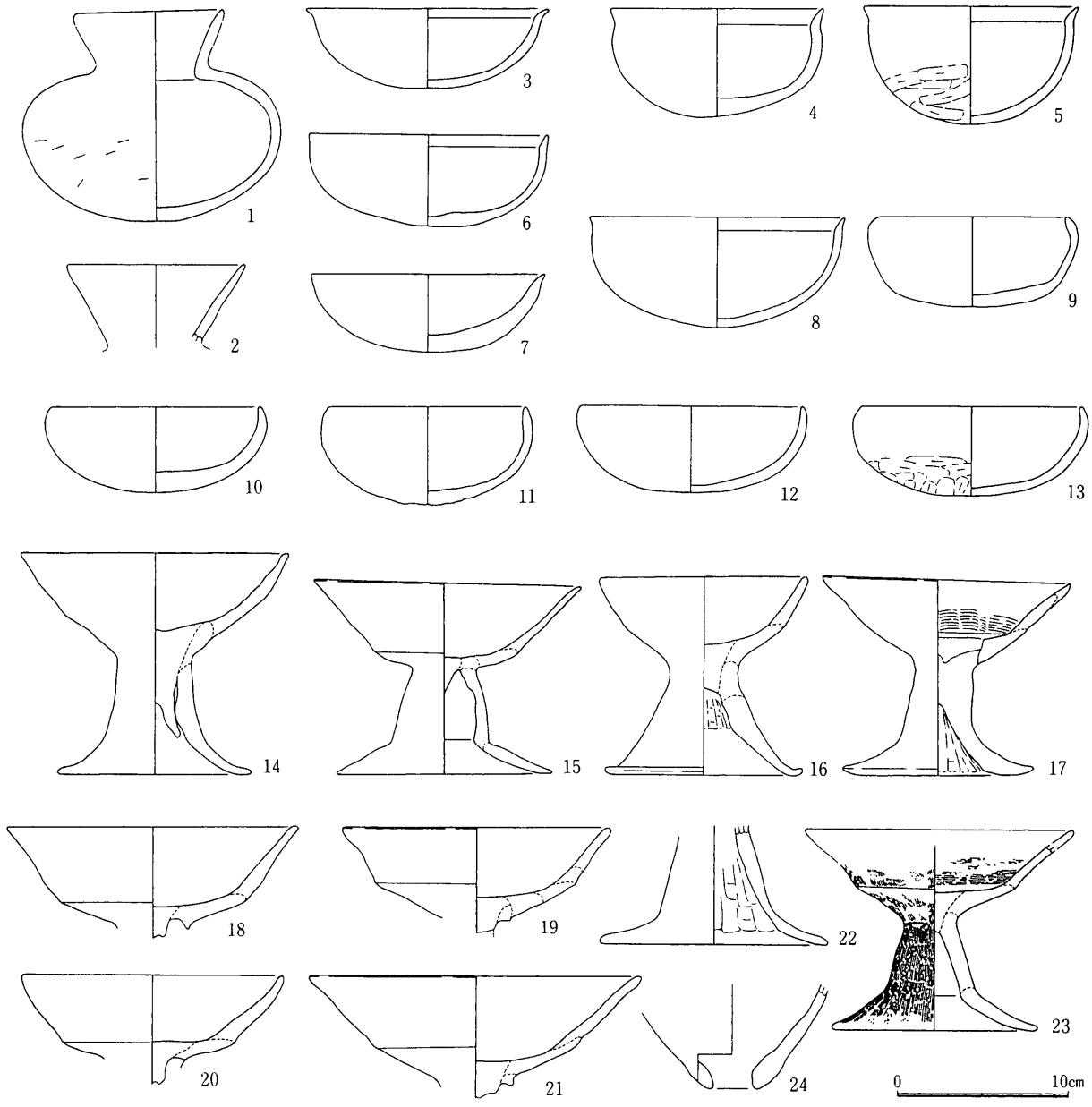
H9・19住居を破壊して構築されるが、住居の大半が調査区域外にあるため全体を検出するにはいたっていない。遺物は平安時代に比定される土器が僅かながらに出土しているが図化できるものはない。

H15号住居

当該遺構はH16号住居と重複関係にあるとされているが、手持ちの資料ではどのような重複関係であったかわからない。再整理作業においても双方の遺物が接合関係にあったり、従来H16号住居出土土器として掲載されている土器にH15と注記されていたりと非常に不鮮明な状態の中での整理作業となったため、本報告においても明確に分離することはできなかった。

出土土器［第13図］には壺（1）、小型丸底（2）、坏（3～13）、高坏（14～23）、甑（24）がある。1の口縁部は強いヨコナデ、体部はナデにより整形されている。胴部下半はそののち荒いヘラケズリを行っている。2は小型丸底の口縁部のみの破片である。坏は、3～8は口縁端部が外反し、9～13は内湾する形態となる。基本的に内外面ともに縦方向もしくは横方向のヘラミガキにより調整されているが、不規則に磨かれるものや13の外面のようにヘラミガキを施さないものもある。またこのうち4・5・8は内面が黒色処理され、5・13の底付近はヘラケズリがされる。高坏も全体がヘラミガキにより調整される。坏部は有稜となるものとそうでないものとに分けることができ、16・17・22の脚内面はヘラケズリされる。23は全体にハケ調整されている。24は底部のみの破片であるが焼成前の穿孔がある。

H15号住居遺物出土状況



第13図　H15号住居出土土器

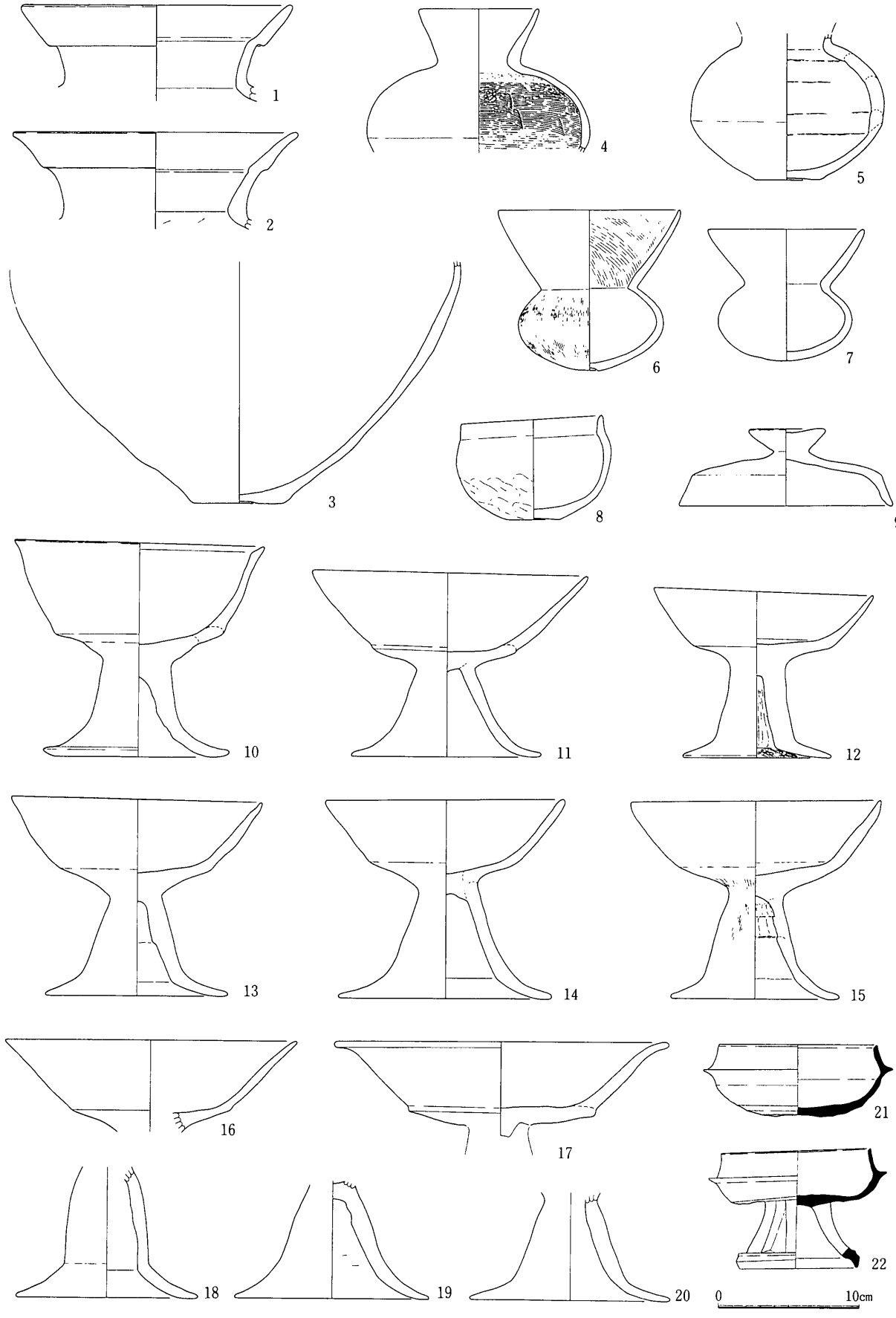
H16号住居

調査区の最も北端で検出された住居でH15号住居と重複関係にあるとされている。

住居形態は長方形を呈し、中央付近に炉が検出されている。

出土土器［第14図］には壺（1～5）、小型丸底（6・7）、鉢（8）、蓋（9）、高坏（10～20）と須恵器の坏（21）及び高坏（22）がある。

1と2は口縁部の破片で、有段口縁となる。2の頸部にはヘラケズリがみられる。肉眼分析ではあるが胎土や外面調整の状況から2と3は同一個体と思われる。4は外面が丁寧にヘラミガキされ口縁端部は強いヨコナデにより整形されている。内面はハケにより調整される。6の口縁部外面はナデによるもので、胴部はハケののちナデを行う。8の底部はヘラケズリがされ、9は全体に丁寧にヘラミガキがされている。高坏は弱いものもあるが坏部に普遍的に稜を持ち、脚部はハの字に広がるものと柱状のものがある。21・22は古式須恵器で双方かなりの歪みがある。22の脚は四角形のスカシが3箇所にある。



第14図　H16号住居出土土器

H17号住居

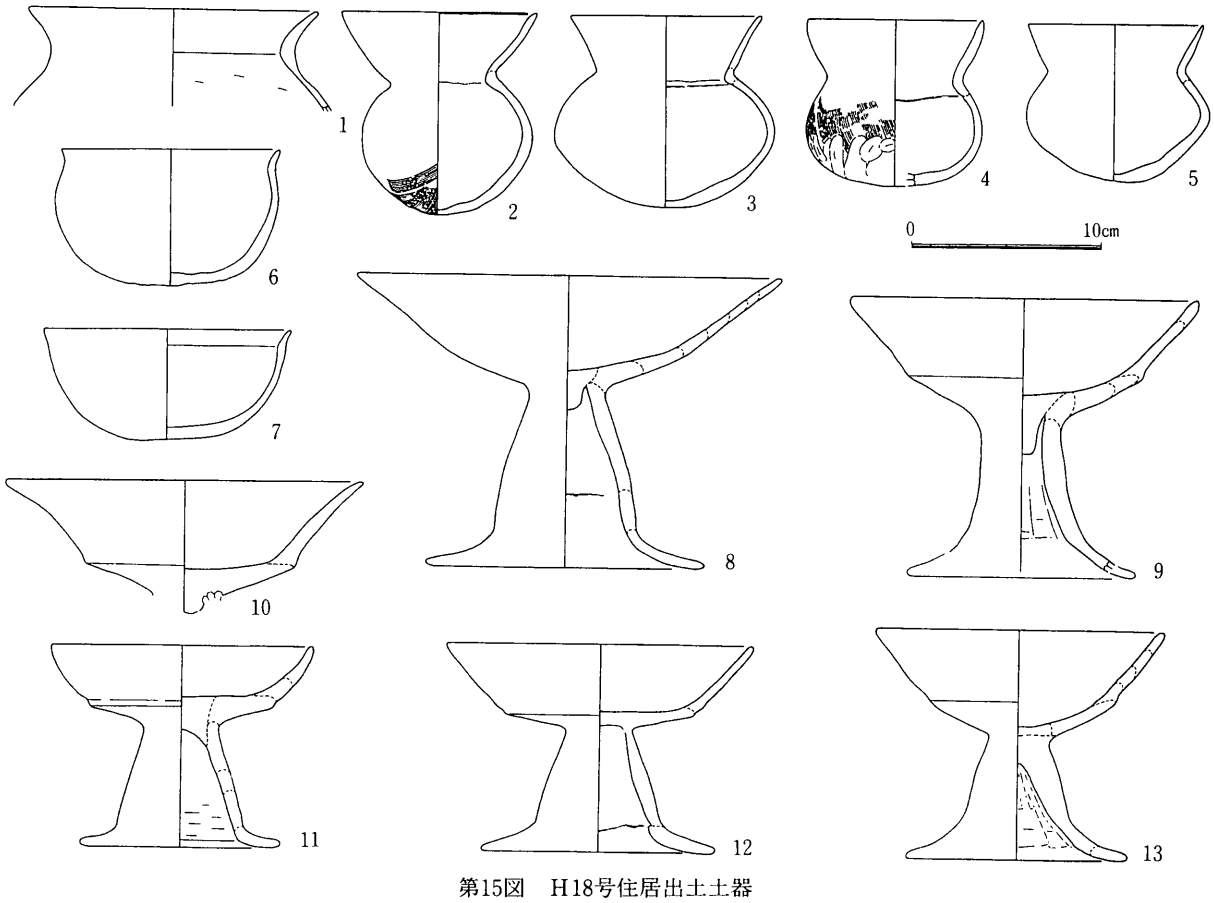
H16号住居を破壊して構築される。住居のほとんどは調査区域外にあるため規模や形態など判然としないが、長方形を呈する住居と考えられる。範囲内において良好に検出されたものの土器の出土はほとんどなく、古墳時代の土器破片が数辺あるのみであり、図化できるものはなかった。

H18号住居

H19号住居を破壊して構築される住居で平面形は長方形を呈する。住居中央に地床炉があり、柱穴は住居隅に築かれているが、南西隅には柱穴は検出されていない。

出土土器［第15図］には、甕（1）、小型丸底（2～5）、鉢（6・7）、高坏（8～13）がある。

1の外面はナデのみで仕上げられ、胴部内面にはヘラケズリがされる。小型丸底は全体にナデによって整形され、口縁端部は強いヨコナデにより整形されている。2と4は底部付近にハケ調整が見られ、4はそののちヘラケズリがされている。6・7は横方向のヘラミガキが施される。8は比較的大形の高坏で全体に丁寧なヘラミガキがされる。9～13の坏部には稜がある。12以外の脚内部はヘラケズリされている。



第15図　H18号住居出土土器

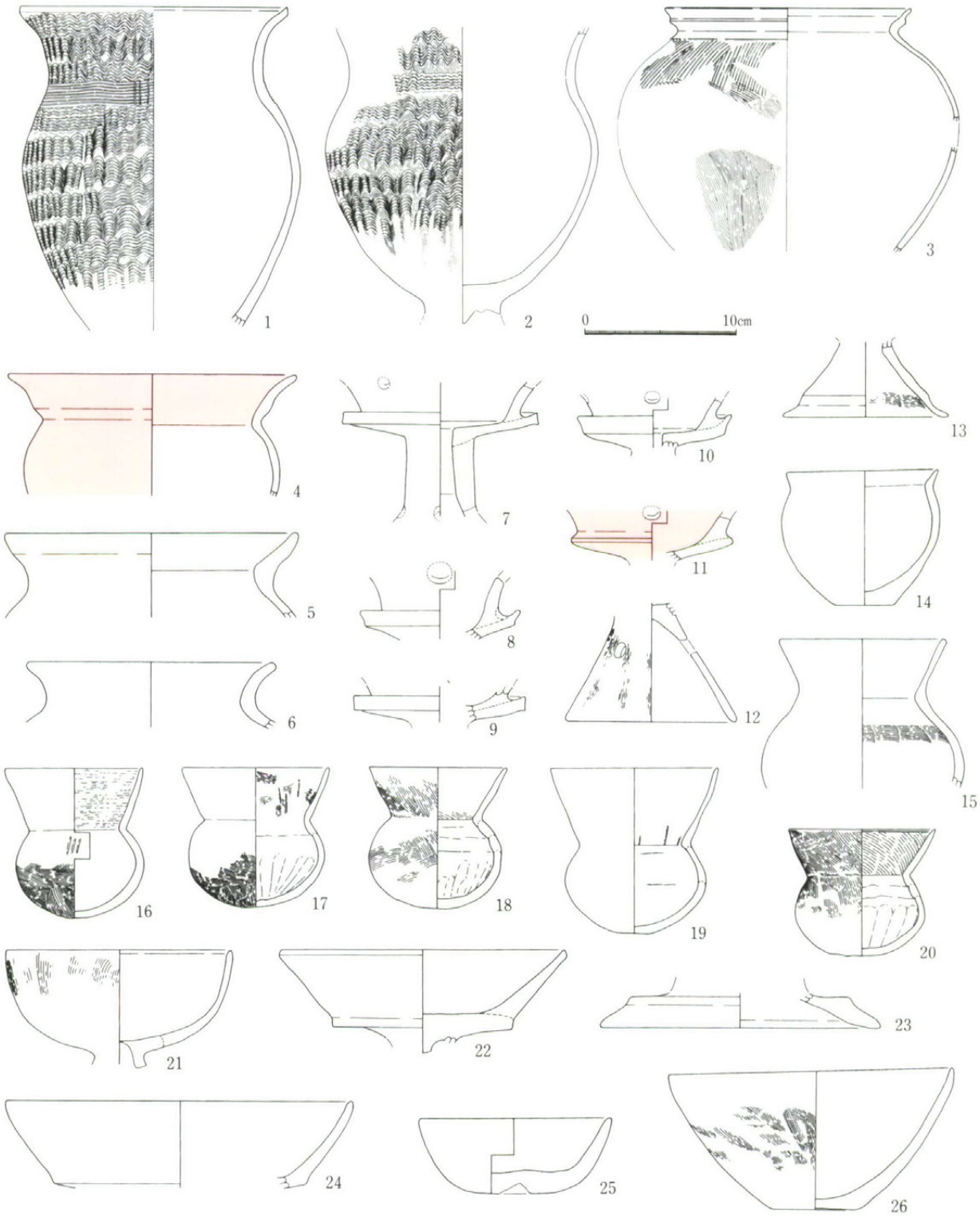
H19号住居

H13号住居と重複関係にあり、東側は調査区域外により検出できず、H18号住居に住居中央付近を破壊されてはいるものの、比較的全体が良好に検出できた、一辺10mほどの正方形を呈する大型住居である。主柱穴は3基検出され、炉は北側主柱穴間に地床炉として築かれている。

出土土器［第16図］には、甕（1・5・6）、台付甕（2・3）、鉢（4・14・25・26）、器台、（7～13）、壺（15）、小型丸底（16～20）、高坏（21～24）と多様の器種がある。

明らかに時期の異なる土器が混在しているが、おそらくH18号住居の土器が混在しているものと思われる。

1は口縁部から胴部下半まで波状文を施文したのち頸部に簾状文を施文している。口縁端部は面取りされ内面は丁寧にヘラミガキされる。3はいわゆるS字状口縁代付甕で、外面はハケ、内面はナデにより調整される。7～11は坏部及び脚部それぞれに孔が穿たれる。北陸系統の土器であろうか。11のみに赤彩がされる。小型丸底は全体にハケ調整が目立ち、19のみナデのみで仕上げられる。23は高坏の脚端部破片である。今回出土した古墳時代の高坏で唯一有段となる脚を持つ高坏である。

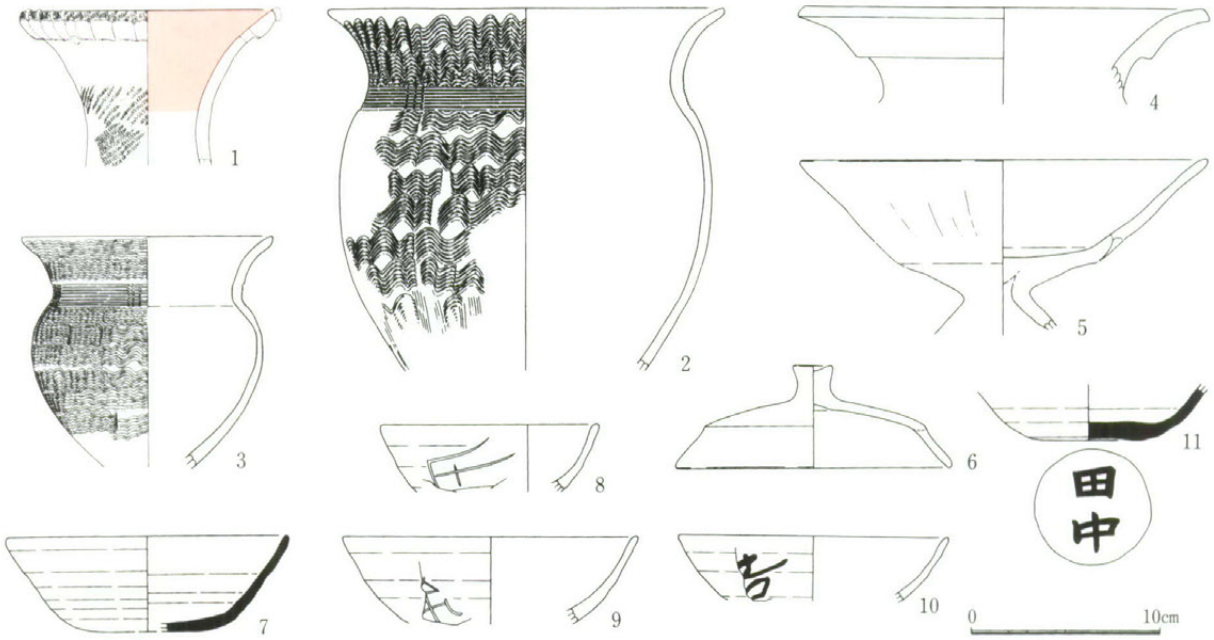


第16図　H19号住居出土土器

遺構外出土土器

第17図に示した土器は調査時において遺構に伴わない土器として整理したものの内、図化しうるものを掲載したものである。

1の壺は口縁部に指頭圧による波状を作り出し、端部と頸部に縄文を施す。また端部には4ヶの突起がある。内面は口縁部のみに赤彩が認められる。このような土器形態は当該地の土器様式には存在せず、東遠江地域の弥生時代後期、「菊川式土器」にその系譜が求められるものであろうか。2・3は器面全体に波状文が施文され頸部には簾状文が施文される。8及び9は内面を黒色処理された平安時代の坏であるが、器面に絵のような線刻がある。破片資料のため双方の全体を把握できておらず、何であるか不明であるが字ではないように思われる。10と11は墨書土器で、10は「吉？」、11は「田中」と読み取ることができが、10は墨書の左側が欠損しているため場合によっては別の字になる可能性もある。



第17図　遺構外出土土器

上山田小学校所蔵資料

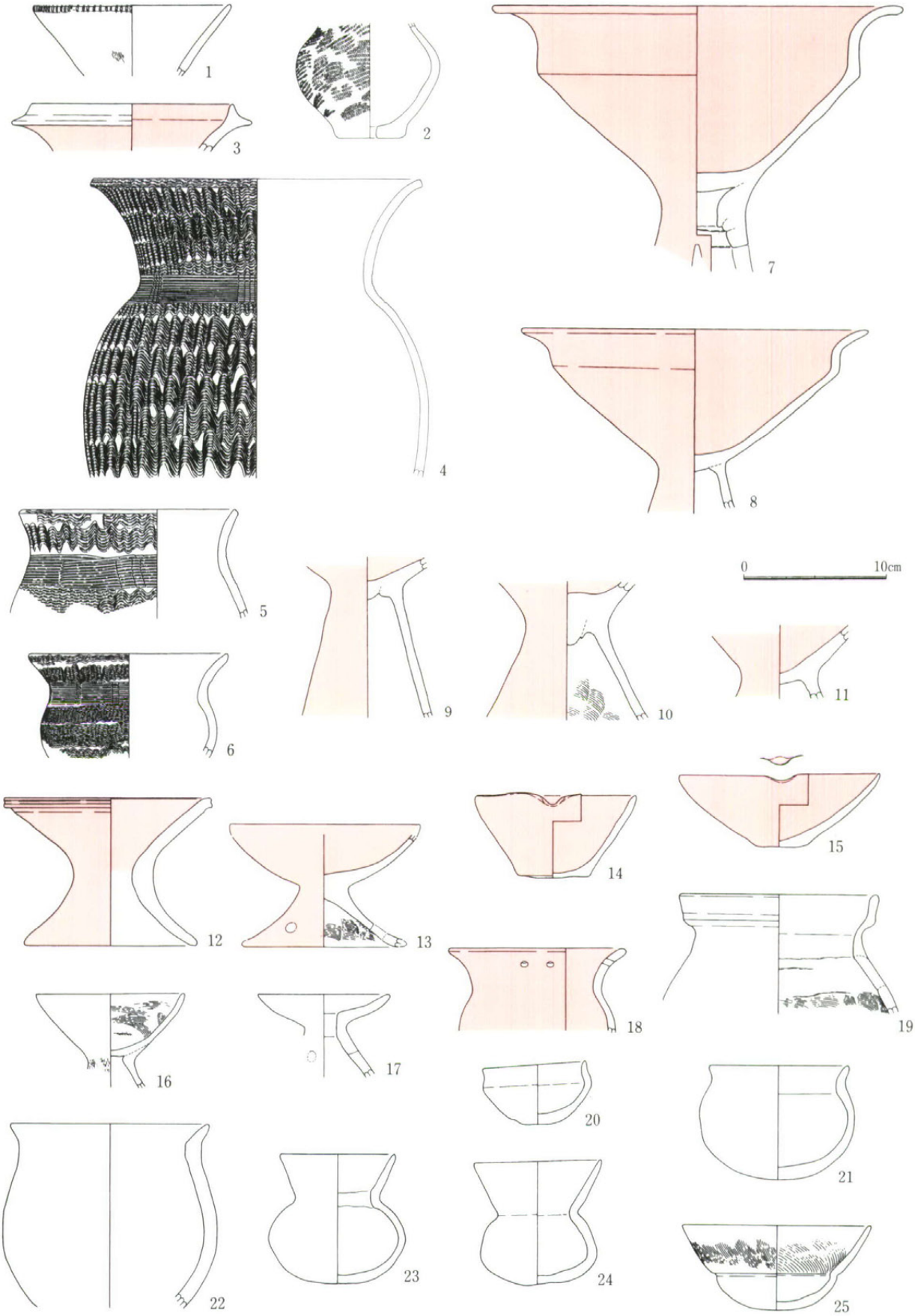
第18図は、過去、町民等によって御屋敷遺跡から採集され、上山田小学校に保管されてあった土器で、その中から図化できるものを実測し掲載した。

昭和30年ごろ行われた御屋敷遺跡周辺の造成工事で多くの遺物が出土したことは前途したが、その時に採集されたものの他、近年採集されたものもある。

1・2は弥生時代中期の栗林式土器で、壺の破片資料である。1は口縁端部にキザミが施され内外面ともハケ調整をした痕跡が残るが、器面が荒れており一部に見られる程度である。2は胴部全体に縄文を施文したもので小形である。

3～15・18は弥生時代後期の箱清水式土器で、甕（4～6）、高坏（7～11）、器台（12・13）、鉢（14・15・18）がある。12は、外面は全面に内面は口縁部に赤彩が施され、口縁端部は面取りがされその部分に凹線文が施文されている北陸系統の土器である。14・15は口縁部の一箇所に片口を持つ。

16・17・19～25は古墳時代の土器で、19は口縁部が受け口状となる甕で、内外面ともにナデにより調整される。北陸系統の土器と考える。



第18図　上山田小学校所蔵資料（1：8）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	成形・調整・文様 外面		内面	備考
Y 1 号住居								
1	壺	17.1		10.0	ハケ→タテミガキ	文様：簾状文2段・J字文	口縁部：ハケ→ヨコナデ　胴部：板ナデ	
2	壺	18.6		7.2	ハケ	文様：短間隔簾状文	ハケ→ナデ	
3	壺	21.2		12.4	ハケ→ヨコミガキ	文様：直線文・連弧文	ナデ	
4	壺	19.0		6.9	タテミガキ	文様：T字文	ヨコミガキ	
5	壺	20.2		7.2	タテミガキ	文様：波状文・T字文	口縁部：ヨコミガキ　胴部：ナデ	
6	壺	18.0		3.5	赤彩・タテミガキ	文様：キザミ　ボタン貼付	口縁部：波状文・刺突文　赤彩・ヨコミガキ	
7	甕	18.2		11.9	ハケ	文様：波状文→簾状文	口縁部：ハケ　胴部：ナデ	
8	甕	15.7		6.4	ナデ	文様：簾状文→波状文	ナデ	
9	甕	14.0		9.6	ナデ	文様：簾状文→波状文	口縁部：ナデ→ハケ　胴部：ナデ	
10	甕	13.0		8.5	ハケ	文様：簾状文→波状文	口縁部：ハケ　胴部：ヨコミガキ	
11	甕	17.4		12.1	ナデ	文様：簾状文・胴部のみ波状文	口縁部：ヨコミガキ　胴部：板ナデ	
12	甕		8.6	24.1	ハケ→タテミガキ	文様：簾状文・縦区画直線文・波状文	ヨコミガキ　板ナデ	
13	甕	14.0		8.8	ハケ		ナデ	
14	甕	15.8		9.6	ハケ		ハケ→ナデ	
15	器台	12.6		8.9	坏部：ヨコミガキ　脚部：ハケ→タテミガキ　円孔3箇所		坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ→ハケ	
16	蓋		23.4	10.0	ナデ→ヨコミガキ		ナデ　ヨコミガキ	
17	蓋		14.0	4.7	ヨコミガキ		ヨコミガキ	
Y 2 号住居								
1	甕	13.0	5.6	12.2	ナデ→タテミガキ	文様：簾状文→波状文	ヨコミガキ	
2	手づくね	5.0	3.1	2.1	ナデ		ナデ	
3	高坏	16.5	10.4	12.6	赤彩　坏部：ヨコミガキ　口縁端部：注口　脚部：タテミガキ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	
4	高坏	22.0	12.0	15.1	赤彩　坏部：ヨコミガキ・有段　脚部：タテミガキ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	
Y 4 号住居								
1	壺	14.9	5.1	19.6	ハケ→タテミガキ　折返し口縁	文様：T字文　ボタン貼付	口縁部：ヨコミガキ　胴部：ナデ・ケズリ・ハケ	
2	壺			15.0	赤彩・ヨコミガキ		ナデ　一部板ナデ	
3	甕	14.3	5.4	18.3	ハケ→底部付近のみタテミガキ	文様：簾状文→波状文	ヨコミガキ	
4	器台	12.4	14.2	15.2	赤彩　坏部：ヨコミガキ　脚部：タテミガキ　脚端部：ヨコミガキ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ヨコミガキ	内部玉2ヶ
5	台付甕	14.4	8.2	24.0	S字状口縁　ハケ		ハケ・ナデ	

第3表　出土土器観察表①

番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様			備考
		口径	底径	器高	外面		内面	
Y 6号住居								
1	壺	20.4		5.9	赤彩・ヨコミガキ		赤彩・ヨコミガキ	
2	壺			6.9	赤彩・ヨコミガキ	文様：T字文	赤彩・ヨコミガキ・ナデ	
H 1号住居								
1	壺	8.8		12.2	ヨコミガキ（全体に荒れる）		ナデ	
2	甕	14.0		10.2	ナデ　口縁部：短受口	文様：波状文→直線文	口縁部：ナデ　胴部：ヨコミガキ	
3	甕	13.6		8.2	ナデ		ナデ	
4	甕	15.0		8.2	ナデ		ナデ	
5	坏	14.0		5.1	ヨコミガキ		ヨコミガキ	
6	坏	13.4		4.4	口縁部：ヨコミガキ　体部：タテミガキ		タテミガキ	
7	坏	14.0		5.6	ヨコミガキ		ヨコミガキ	
8	坏	13.6		3.8	ヨコミガキ		タテミガキ	
H 3号住居								
1	甕	16.6		8.4	ナデ　部分的にヨコミガキ		ナデ	
2	甕	19.4		16.7	ナデ		ナデ　板ナデ	
3	高坏	12.1		5.8	タテミガキ		タテミガキ	
H 4号住居								
1	器台	12.0	14.0	11.3	坏部：ヨコミガキ　脚部：タテミガキ　円孔3箇所		坏部：タテミガキ　脚部：ナデ→ハケ	
H 6号住居								
1	坏	12.8	6.5	3.8	ロクロナデ　底部：回転糸切り		ロクロナデ	
2	坏	13.0	8.0	4.0	ロクロナデ　底部：回転糸切り		ロクロナデ	
3	坏	14.4		3.1	ロクロナデ		ロクロナデ	
4	蓋		14.0	3.3	ロクロナデ		ロクロナデ	
H 7号住居								
1	甕	15.8		12.1	ナデ	文様：簾状文→波状文	ナデ	
2	器台	8.9	11.0	8.4	坏部：ナデ・ハケ　脚部：タテミガキ　円孔4箇所		ナデ	
H12号住居								
1	坏	15.6	11.8	3.3	ロクロナデ　底部：回転ヘラケズリ　高台		ロクロナデ	
2	坏	14.8	11.2	3.5	ロクロナデ　底部：回転ヘラケズリ　高台		ロクロナデ	

第4表　出土土器観察表②

番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高	外面	内面	
3	蓋		16.1	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	
H15号住居							
1	壺	8.7		12.2	ナデ　胴部：ヘラケズリ	ナデ	
2	小型丸底	10.2		4.9	ナデ	ヨコミガキ	
3	坏	14.1		4.6	ヨコミガキ	タテミガキ	
4	坏	12.5		6.3	ヨコミガキ	ヨコミガキ　黒色処理	
5	坏	12.6		6.8	ヨコミガキ→ヘラケズリ	不規則なミガキ　黒色処理	
6	坏	14.0		5.3	ヨコミガキ	口縁端部：ヨコミガキ　体部：タテミガキ	
7	坏	13.8		4.5	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
8	坏	15.0		6.4	ヨコミガキ	不規則なミガキ　黒色処理	
9	坏	11.0		5.2	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
10	坏	12.2		5.0	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
11	坏	11.6		5.7	ヨコミガキ（著しい荒れ）	ヨコミガキ	
12	坏	13.1		5.0	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
13	坏	12.9		5.2	ナデ・ヘラケズリ	タテミガキ	
14	高坏	15.8	11.2	12.9	坏部：ヨコミガキ　脚部：タテミガキ　脚端部：ヨコミガキ	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ	
15	高坏	15.7	12.3	11.1	タテミガキ	坏部：タテミガキ　脚部：ナデ	
16	高坏	12.3	11.6	11.6	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ・ヘラケズリ	
17	高坏	14.4	11.1	11.6	タテミガキ　脚端部：ヨコミガキ	坏部：ナデ→ハケ→ヨコミガキ	
18	高坏	17.0		6.7	タテミガキ	ヨコミガキ	
19	高坏	15.8		6.4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
20	高坏	15.4		6.5	タテミガキ	タテミガキ	
21	高坏	19.4		7.2	荒れ、細部不明	荒れ、細部不明	
22	高坏		13.4	7.1	タテミガキ	ヘラケズリ	
23	高坏		12.0	11.0	ナデ→ハケ	坏部：ハケ　脚部：ナデ	
24	甑		2.7	6.1	ナデ　底部：焼成前穿孔	ナデ	
H16号住居							
1	壺	19.4		6.7	口縁部：ヨコミガキ　頸部：タテミガキ	口縁部：ヨコミガキ　体部：ナデ	
2	壺	20.4		6.8	口縁部：ヨコミガキ　頸部：タテミガキ	口縁部：ヨコミガキ　体部：ヘラケズリ	

第5表　出土土器観察表③

番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高	外面	内面	
3	壺		6.4	16.9	ヨコミガキ	ナデ	
4	壺	8.4		10.0	タテミガキ	口縁部：タテミガキ　体部：ハケ	
5	壺		4.5	10.2	ヨコミガキ　底部：軽いヘラケズリ	ナデ	
6	小型丸底	13.0		11.2	口縁部：ナデ　体部：ハケ→ナデ	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	
7	小型丸底	11.0		9.3	ナデ	ナデ	
8	鉢	10.0	3.8	7.3	ヨコミガキ→ヘラケズリ	ヨコミガキ・ナデ	
9	蓋		15.2	5.4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
10	高坏	17.8	13.3	15.3	タテミガキ	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ	
11	高坏	19.3	13.8	13.2	タテミガキ	坏部：タテミガキ　脚部：ナデ	
12	高坏	15.5	10.3	12.1	タテミガキ　脚端部：ヨコミガキ	坏部：ヨコミガキ→タテミガキ　脚部：ハケ	
13	高坏	17.9	13.0	14.0	タテミガキ	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ・ヘラケズリ	
14	高坏	17.1	15.2	14.1	タテミガキ	坏部：タテミガキ　脚部：ナデ・ヘラケズリ	
15	高坏	17.8	12.0	14.1	ハケ→タテミガキ	坏部：タテミガキ　脚部：ナデ・ヘラケズリ	
16	高坏	20.8		6.5	タテミガキ	タテミガキ	
17	高坏	23.8		6.7	タテミガキ	タテミガキ	
18	高坏		13.0	9.2	タテミガキ	ナデ	
19	高坏		13.8	8.3	タテミガキ	ナデ・ヘラケズリ	
20	高坏		14.2	7.7	タテミガキ	ナデ	
21	坏	11.0		5.1	回転ナデ　底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	TK23
22	高坏	10.6	8.3	8.8	回転ナデ　脚部：3方スカシ	回転ナデ	TK23
H18号住居							
1	甕	15.0		5.1	ナデ	口縁部：ナデ　体部：ヘラケズリ	
2	小型丸底	10.3		10.4	ナデ　底部：ハケ	ナデ	
3	小型丸底	10.0		9.9	ナデ	ナデ	
4	小型丸底	9.2		8.6	ナデ→ハケ→ヘラケズリ	ナデ	
5	小型丸底	9.1		8.1	ナデ	ナデ	
6	坏	11.5		7.1	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
7	坏	13.0		5.8	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
8	高坏	22.4	14.6	15.2	タテミガキ	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ	

第6表　出土土器観察表④

番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高	外面	内面	
9	高坏	19.2		14.2	坏部：ヨコミガキ　脚部：タテミガキ　脚端部：ヨコミガキ	坏部：タテミガキ　脚部：ナデ・ヘラケズリ	
10	高坏	18.8		6.9	タテミガキ	タテミガキ	
11	高坏	13.8	10.6	10.7	ナデ	坏部：ナデ　脚部：ナデ・ヘラケズリ	
12	高坏	16.0	12.2	11.0	タテミガキ	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ	
13	高坏	15.3	11.7	12.2	坏部：ヨコミガキ　脚部：タテミガキ　脚端部：ヨコミガキ	坏部：タテミガキ　脚部：ヘラケズリ	
H19号住居							
1	甕	17.6		21.2	ナデ→タテミガキ　文様：波状文→簾状文	ヨコミガキ	
2	台付甕			19.3	ハケ→タテミガキ　文様：波状文	ナデ→ヨコミガキ	
3	台付甕	16.0		15.7	S字状口縁　ハケ	ナデ	
4	鉢	19.0		7.9	赤彩・ヨコミガキ	ヨコミガキ　口縁部のみ赤彩	
5	甕	19.0		5.7	ヨコミガキ→ナデ	ヨコミガキ	
6	甕	16.4		4.4	ナデ	口縁部：ナデ　体部：ヨコミガキ	
7	器台			8.7	タテミガキ　坏部：円孔4ヶ？　受部：ナデ	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ	
8	器台			4.5	タテミガキ　坏部：円孔4ヶ？　受部：ヨコミガキ	ヨコミガキ	
9	器台			2.4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
10	器台			3.3	ヨコミガキ　坏部：円孔　受部：ナデ	ヨコミガキ	
11	器台			3.4	赤彩・タテミガキ　坏部：円孔　受部：ヨコミガキ	赤彩・ヨコミガキ	
12	器台		11.0	7.9	ハケ→タテミガキ　円孔3ヶ	ナデ	
13	器台		10.8	4.9	ナデ	ナデ・ハケ	
14	鉢	9.8	3.8	9.0	ナデ	ナデ	
15	壺	11.0		9.9	タテミガキ	口縁部：タテミガキ　体部：ナデ→ハケ	
16	小型丸底	9.0		9.8	ハケ→ナデ　体部に3本のキザミ	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	
17	小型丸底	9.7		9.1	ナデ・ハケ	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	
18	小型丸底	9.0		9.3	ハケ→ナデ	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	
19	小型丸底	11.0		10.9	ナデ	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	
20	小型丸底	9.6		8.4	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ハケ・ナデ	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	
21	高坏	14.8		8.6	ハケ→タテミガキ	タテミガキ	
22	高坏	18.6		6.9	タテミガキ	タテミガキ	
23	高坏		18.4	2.3	ヨコミガキ　有段脚	ナデ	

第7表　出土土器観察表⑤

番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様			備考
		口径	底径	器高	外面		内面	
24	高坏	22.8		5.7	タテミガキ		タテミガキ	
25	鉢	12.4		4.9	ナデ　底部にヘコミ		ナデ	
26	鉢	18.6	5.5	9.3	ハケ→ヨコミガキ		ヨコミガキ	
遺構外								
1	壺	13.2		8.1	ハケ→ナデ	口縁端部：ＬＲ縄文→突起４ヶ ユビオサエによる波状口縁　円孔 頸部：ＬＲ縄文	口縁部：赤彩　頸部：ナデ	菊川式土器
2	甕	20.8		18.8	ハケ→タテミガキ	文様：波状文→簾状文	ヨコミガキ	
3	台付甕	13.2		12.0	ハケ→タテミガキ	文様：簾状文→波状文	ヨコミガキ	
4	壺	21.0		5.0	口縁部：ヨコミガキ　頸部：タテミガキ		ヨコミガキ	
5	高坏	21.2		9.1	タテミガキ→ナデ		タテミガキ	
6	蓋		14.6	5.4	タテミガキ		ナデ	
7	坏	14.6	5.2	5.0	ロクロナデ　底部：ヘラケズリ		ロクロナデ	須恵器
8	坏	11.3		3.5	ロクロナデ　線刻		ロクロナデ　黒色処理	
9	坏	15.4		4.6	ロクロナデ　線刻		ロクロナデ　黒色処理	
10	坏	14.0		3.4	ロクロナデ　墨書「吉？」		ロクロナデ　黒色処理	
11	坏		6.0	2.9	ロクロナデ　墨書「田中」　底部：回転糸切り		ロクロナデ	須恵器
上山田小学校所蔵資料								
1	壺	13.8		4.9	ハケ	文様：口縁端部にキザミ	ヨコミガキ	
2	壺		5.0	8.0	ナデ　底部：焼成前穿孔	文様：ＬＲ縄文	ナデ	
3	壺	14.0		3.3	受部：ナデ　口縁下部：赤彩・ヨコミガキ		赤彩・ヨコミガキ	
4	甕	23.2		20.7	ナデ	文様：波状文→簾状文	ヨコミガキ	
5	甕	15.8		7.6	ナデ	文様：波状文→簾状文	ヨコミガキ	
6	台付甕	14.0		7.4	ナデ	文様：簾状文→波状文	ヨコミガキ	
7	高坏	28.8		18.5	赤彩　口縁部：ヨコミガキ　坏下部～脚部：タテミガキ　三角スカシ４ヶ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	
8	高坏	24.2		12.9	赤彩　坏部：ヨコミガキ　脚部：タテミガキ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	
9	高坏			11.3	赤彩・タテミガキ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	
10	高坏			9.8	赤彩・タテミガキ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	
11	高坏			5.2	赤彩・タテミガキ		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	
12	器台	14.4	12.0	10.3	赤彩・ヨコミガキ　口縁端部：凹線文		坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ	北陸系

第８表　出土土器観察表⑥

番号	器　種	法　量（cm）			成　形・調　整・文　様		備　考
		口径	底径	器高	外　面	内　面	
13	器台			7.9	坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：赤彩・タテミガキ　円孔３ヶ	坏部：赤彩・ヨコミガキ　脚部：ナデ→ハケ	
14	鉢	10.1	5.2	6.0	赤彩・ヨコミガキ　注口	赤彩・ヨコミガキ	
15	鉢	11.0	3.2	5.3	赤彩・タテミガキ　注口	赤彩・ヨコミガキ	
16	器台	10.4		6.6	ハケ？	坏部：ハケ→ナデ　脚部：ナデ	
17	器台	9.2		5.9	ミガキ？　脚部：円孔	坏部：ヨコミガキ　脚部：ナデ	
18	鉢	12.5		5.9	赤彩・ヨコミガキ　円孔２ヶ	赤彩・ヨコミガキ	
19	甕	14.0		8.3	ナデ	ナデ　体部：ハケ	北陸系
20	鉢	7.2	2.1	4.4	ナデ	ナデ	
21	鉢	9.7		8.0	ナデ？	ミガキ？	
22	甕	14.0		12.8	ナデ	ナデ	
23	小型丸底	8.0		8.7	ナデ　底部：軽いヘラケズリ	ナデ	
24	小型丸底	10.9		8.7	ナデ	ナデ	
25	小型丸底	13.2		5.9	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	口縁部：ハケ→ナデ　体部：ナデ	

第９表　出土土器観察表⑦

報告書抄録

ふりがな	おやしきいせき		
書名	御屋敷遺跡		
副書名	ホテル八幡増築工事に伴う御屋敷遺跡出土資料の再整理		
編著者名	寺島孝典		
編集機関	上山田町教育委員会	電話番号	026－275－4557
所在地	〒389-0897　長野県更級郡上山田町温泉四丁目15番地１		
発行年月日	2002年３月29日		
発掘調査期間	1971年３月18日～４月10日	調査面積	300㎡
再整理作業期間	2000年３月13日～３月27日　2000年４月10日～９月27日		

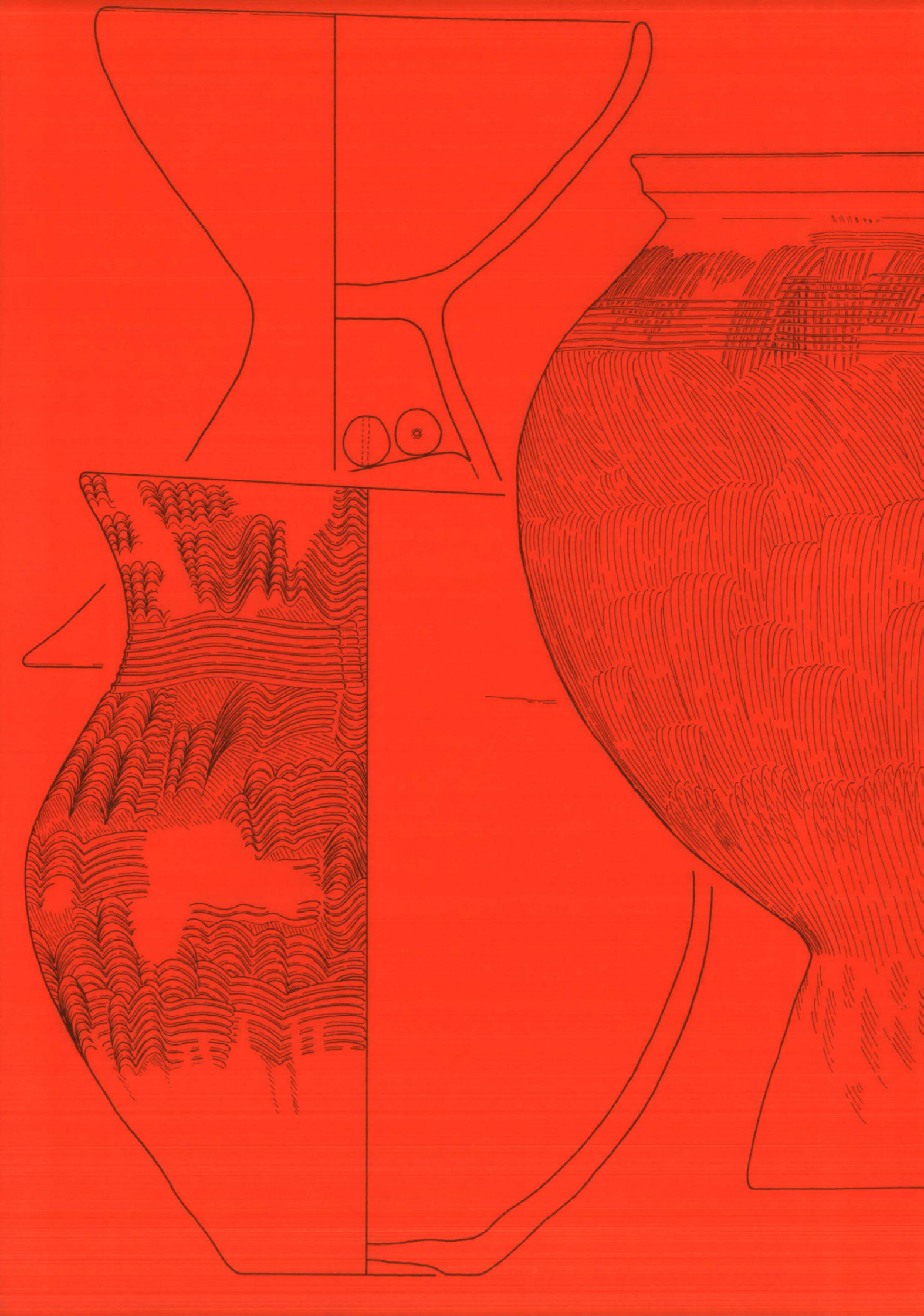
市町村コード	20501	遺跡番号	A－31	北緯36度27分45秒	東経138度08分55秒
所収遺跡名	御屋敷遺跡（おやしきいせき）	所在地	長野県更級郡上山田町大字新山724（ながのけんさらしなぐんかみやまだまちおおあざあらやま）		

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弥生時代中期	なし	土器	
弥生時代後期	住居跡　９軒	土器	Ｓ字状口縁台付甕
古墳時代	住居跡　７軒	土器・古式須恵器	
平安時代	住居跡　５軒	土器・須恵器	刻書土器・墨書土器

御屋敷遺跡

平成14年３月20日　印刷

平成14年３月29日　発行

編集・発行　上山田町教育委員会

印　　刷　ほおずき書籍株式会社